

ル 4
3137
3



日光山志卷之三

目錄

御山内寺院坊舎
 衆徒二十箇院
 八十坊舎
 青龍権現
 淨光寺
 慈雲寺
 靈庇岡
 鳴虫山
 素麩彫園

学頭
 御留主居
 御奉行屋敷
 西町
 古額
 楨玲洞
 納骨塔
 鳴虫紅葉園
 日光八景

修学院表門圖
 別所四箇院
 火之番屋敷
 兄弟契
 向河原
 合満源雨園
 通河橋
 松立山
 妙道院



釋迦堂

諸家墓碑

七瀧 同圖

二子山

凍岩

興雲律院 同圖

漆園

霧降瀧 同圖

山王社

池石

寂光

寂光寺

石燈籠

大牽地藏

如室山蔓延松 同圖

不動岩 同圖

同氷とうがりの図

荻垣面

小倉山

生岡大日堂 同圖

久次良村

蓮華石

為念佛堂

石名石

殉死墓碑

禁断石

飛桃子

指子岩

外山 同圖

御茶亭

小倉春曉圖 八景

尾立岩

糠塚

大日堂 同圖

求聞持堂跡

三十番神堂

不動堂

釘念佛縁起

羽黒瀧

清瀧権現

尾尾道

深澤茶屋

方等瀧 同圖

不動堂

拜殿

寂光瀧

裏見瀧 同圖

清瀧寺

馬込村 同圖

地藏堂

殺若滝 同圖

大平

寂光権現

同伊藤長胤詩

清瀧村 同圖

清瀧親音堂 並列不

前二荒山 并同穴

劔峯

中葉屋



志卷之三

植田孟縉編輯

御山内寺院坊舎

一山の學路一院亮徒廿子院別不四子院外小一院

於合廿六院是を一山乃大亮と唱ふ外小一場八十坊あり

學頭 佛學院と号以佛岩谷よりあり此寺北表門と姓古 淨教の所

なりとぞ元禄に未年六月淨教並小お成其後享保年中淨門を修

學院へ編入といふ室町家の代管を移され淨經營ありし淨門ゆゑ

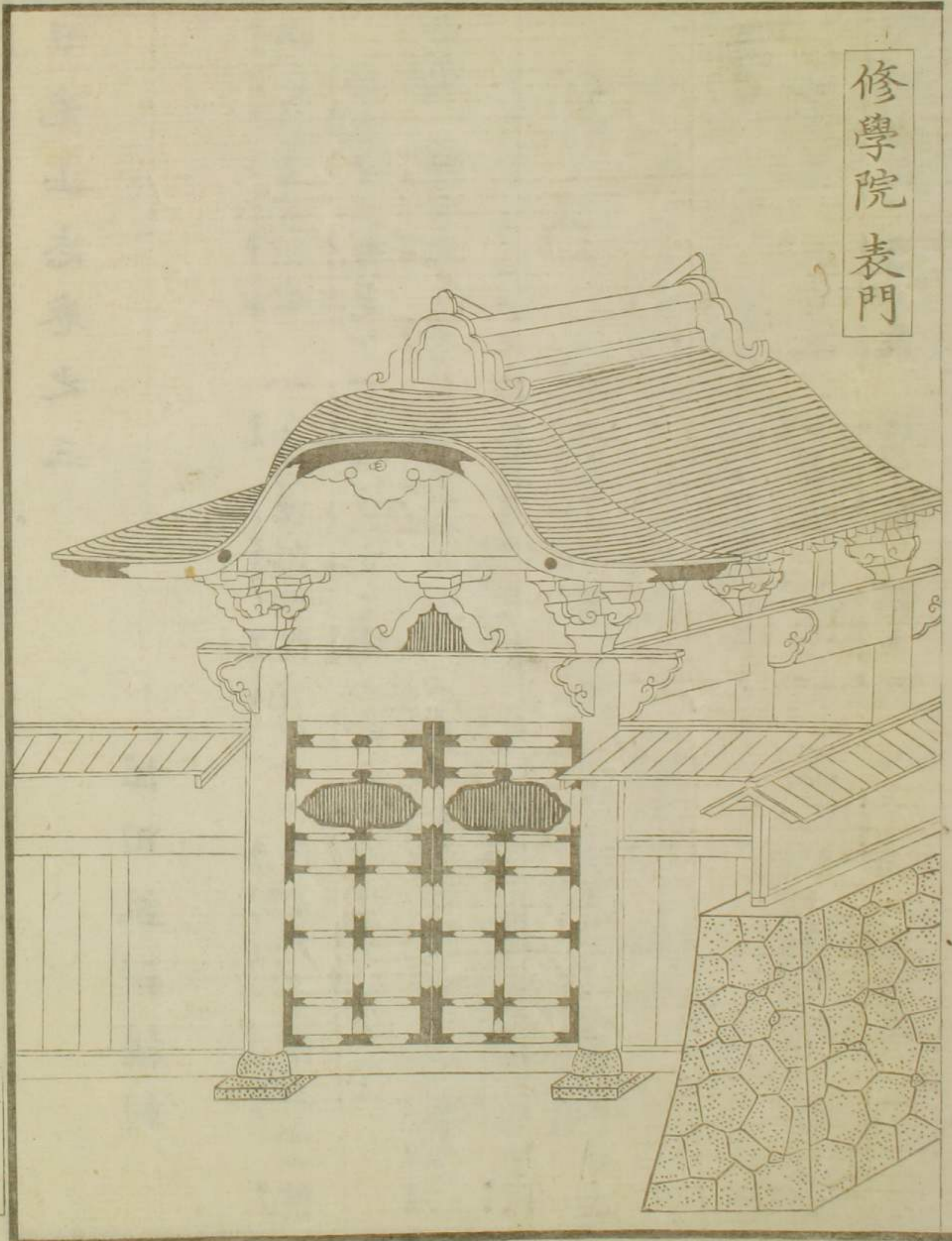
世に稀ある通作なり士人等稱して二階淨門と唱ふ

衆徒二十院 東山谷佛岩谷中ふあり

南照院 安居院 日増院 遊城院 教城院 櫻本院 禪智院

唯心院 藤本院 醫王院 護光院 浄土山谷 養源院 花藏院

修學院表門



三ノ一

惠宗院

法門院

以上仁峯谷

照号院

淨土院

觀音院

實教院

光樹院

以上中山

冲苗守居

是ハ

光樹院の因より一院兼職之ハ法勢乃階級又ハ老若の

事おもよハ其器又尚ほを撰ビ光樹院の因より撰らる職あり
 冲苗守居並社務人以下神人又ハふる浦が冲苗守居の指揮

別所口ヶ院

大樂院

仁峯谷

龍光院

神皇の御

安養院

中山新宮別所

無量院

中山大師堂別所

八拾坊舎

妙月坊

妙金坊

真鏡坊

日城坊

本龍坊

光榮坊

悦花坊

城秀坊

杉中坊

鏡泉坊

大光坊

祐南坊

永親坊

實勝坊

能親坊

道福坊

以上赤山谷

正任坊

祐源坊

因宗坊

親妙坊

亮心坊

鏡徳坊

正定坊

妙力坊

通宗坊

大月坊

龍觀坊	常觀坊	龍園坊	淨久坊	林教坊	妙日坊	以上山岩谷
勝泉坊	奔月坊	園觀坊	城了坊	懺空坊	通順坊	光養坊
通勝坊	慈性坊	仲音坊	不老坊	行實坊	醜醜坊	守光坊
城祐坊	妙珍坊	以上山岩谷	不動坊	智觀坊	願若坊	園祐坊
揚正坊	教觀坊	深妙坊	定福坊	正園坊	慶住坊	正範坊
觀德坊	唯教坊	什光坊	永南坊	園忠坊	以上山岩谷	大林坊
光禪坊	禪教坊	順教坊	實教坊	文月坊	理宣坊	蓮勝坊
教光坊	妙園坊	深教坊	金養坊	正覺坊	揚秀坊	林守坊
道新坊	以上山岩谷					

濟奉行屋敷 此門前の路白 濟教地後沙極坂より西乃方は水町
 系町蓮華石町へ達し 濟山内筋より中禪寺式ハ寂光荒次又ハ足尾
 池への徒来あり

火之番屋敷 組形屋敷と相對是ハ濟山内火防の法備へり
 爰と下新石より二ヶ所ふ初番一慶安又平六月より八五子千人
 組へ 命せし是既有人而組同心在初せしりど是も寛政乃初小
 新石一子而を廢せられ爰の一ヶ所となりし夫より至る子人既是人組
 既又人同心は十人外又歩人あり 濟山内を發揚しととは又十日
 交習ある成今ハ半年来初となり

青龍權現 新神社とも唱ふりとハ火之番屋敷不社既在て大なる
 池ありあり 由奉行屋敷より坊中の阿よりを若女神谷と號し
 今も是は社乃ありゆ名なり 濟護座以來ハ其池水を填て火之
 番屋敷とせし是其河より日新町も俗人屋敷又ハ山に氏の子代等
 住居の地は渡りたる既新神社も今の山際と移し由備は神社と
 弘法大師入唐し天台山乃若龍寺に寓する時其寺の鎌守神又新

弘法東漸の事を初に留胡の初弘法守護神ありと云
社を勧請し青龍権現と崇奉祀するの始なり尚山も弘仁年中空
海和尚登山し龍尾窟光の社跡を勧請し古義真言乃秘密を傳へ
らばしゆ名其流下乃僧等弘法擁護社を醍醐より勧請せし神
社ありと云

西町 或ハ入町にも唱山内肉の西にあり町あり 仁軒町

原町 袋町 本町 上中下 大工町 上中下 板挽町 此町に從横に

區を分ち肆店並例又軒を並に連住す

兄弟契 東ハ松原町より西町にふるを町界を餘の者と三月上巳の

以よりして若菜摘を初と云或は花見とも名附たりひ小親との

を誘引し山林系世の花を爲て花遊などは若酒會或携へ三弦を
鳴らし鼓踏しと云ひ舞遊真すと云土風のあると云是哉

名附く兄弟ちぎりと唱し四月八日を終と云

淨光寺 板挽町にあり還源山妙覺院と号を以寺りとハ弘法より

淨光寺往古淨光坊と号し上世尚山の本院庭主光院乃供僧の

其一なりしが往古應永年中光院乃後吾女神谷へ移すと

いふ又往生院といふをもと弘法地蔵堂の邊に在り摠山の墓所小

く空海師の妙覺門乃額を掲しり然るに此地を一山の鬼の小崗る

ゆ名に宿禰して吾女神谷へ移す其後又寛永十七年十月往生院

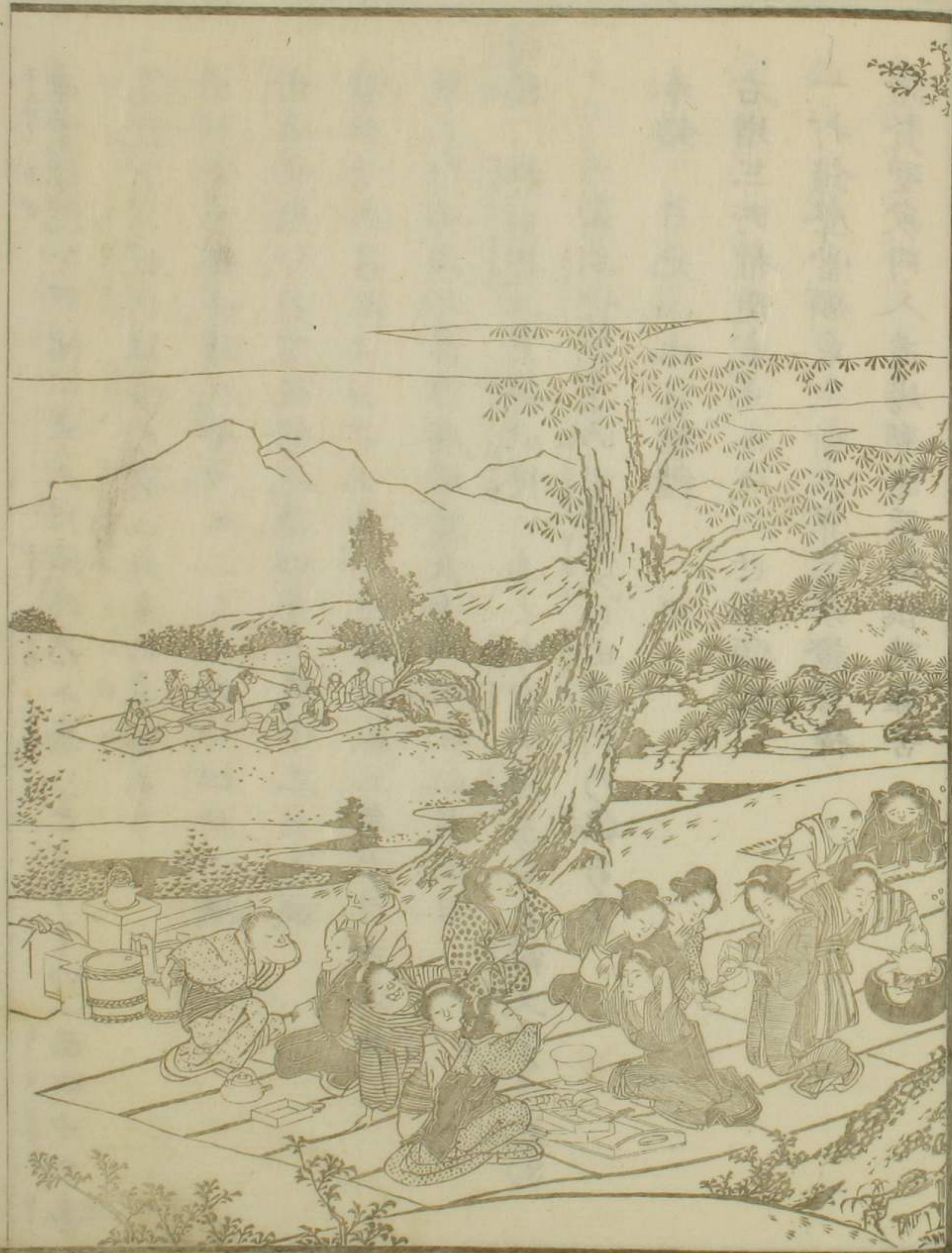
第六供僧乃坊と云に綿木村の西今の地へ移すと云ふ舊記小見え

多る由往生院の舊跡を今淨光寺乃弥陀堂あり六供淨光坊の跡ハ

正しく淨光寺なりされを往生院と淨光坊今ハ合し淨光寺と

稱するよ古淨光坊ハ六世の一よりありしゆ名を遺名のと云

今も土人為淨光寺のと云六供と稱せり備古より傳はり光院



兄弟契
の遊宴

徳誼画

本寺孫院を万治二年八月月城乃為小桑の寺と云ふ西町中の番
蓋院と云は境内に古の當山座主の墓碑あり

卅四世昌繼逆修文安乙丑二〇六月廿四日入滅

卅五世法印昌宣逆修延徳四年八月十三日入滅

權少僧都昌源年月不見法印昌顯大永三年六月廿六日

權大僧都法印昌淳廣塔慶長十二丁未伍月五日

鐘銘 鐘は徑二尺許に鐘はもと本宮の鐘あると銘文あり文の

二年本宮より此所へ移入の由再刻の銘あり

奉鑄 日光山本宮推鐘 一口

右増三所權現威光為成二世各願也

一打鐘聲當願衆生斷三界苦頓證菩提

諸賢聖衆入道場願諸惡趣俱時離苦

當將軍源朝臣成氏公

御留守權大僧都法印座禪院昌繼

惣政所西本坊昌宣

且那古戸道光 氏吉

本願權律師源觀等穀弘繼

大工大和權守浦部春久

于時長祿三年乙卯十二月九日敬

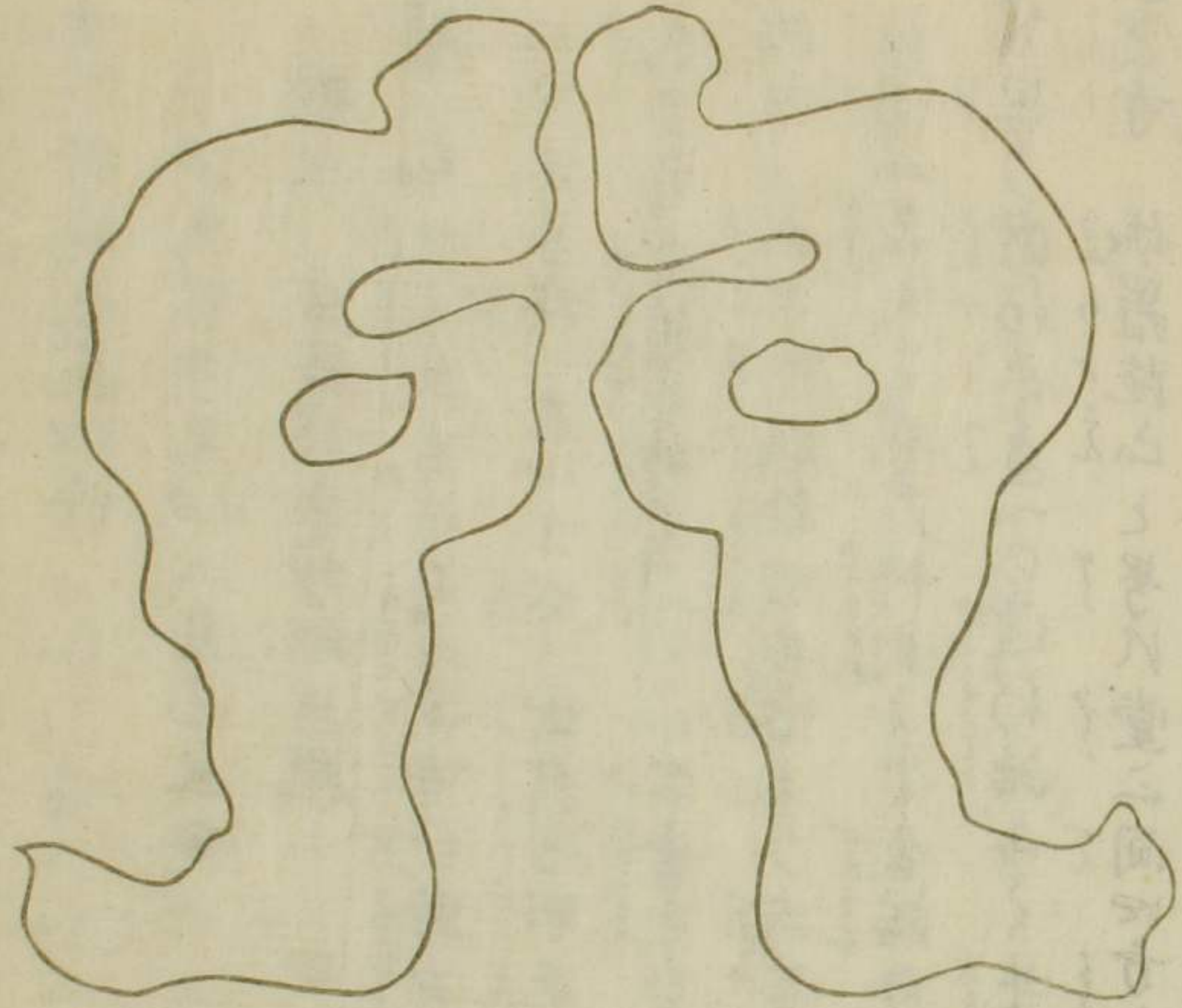
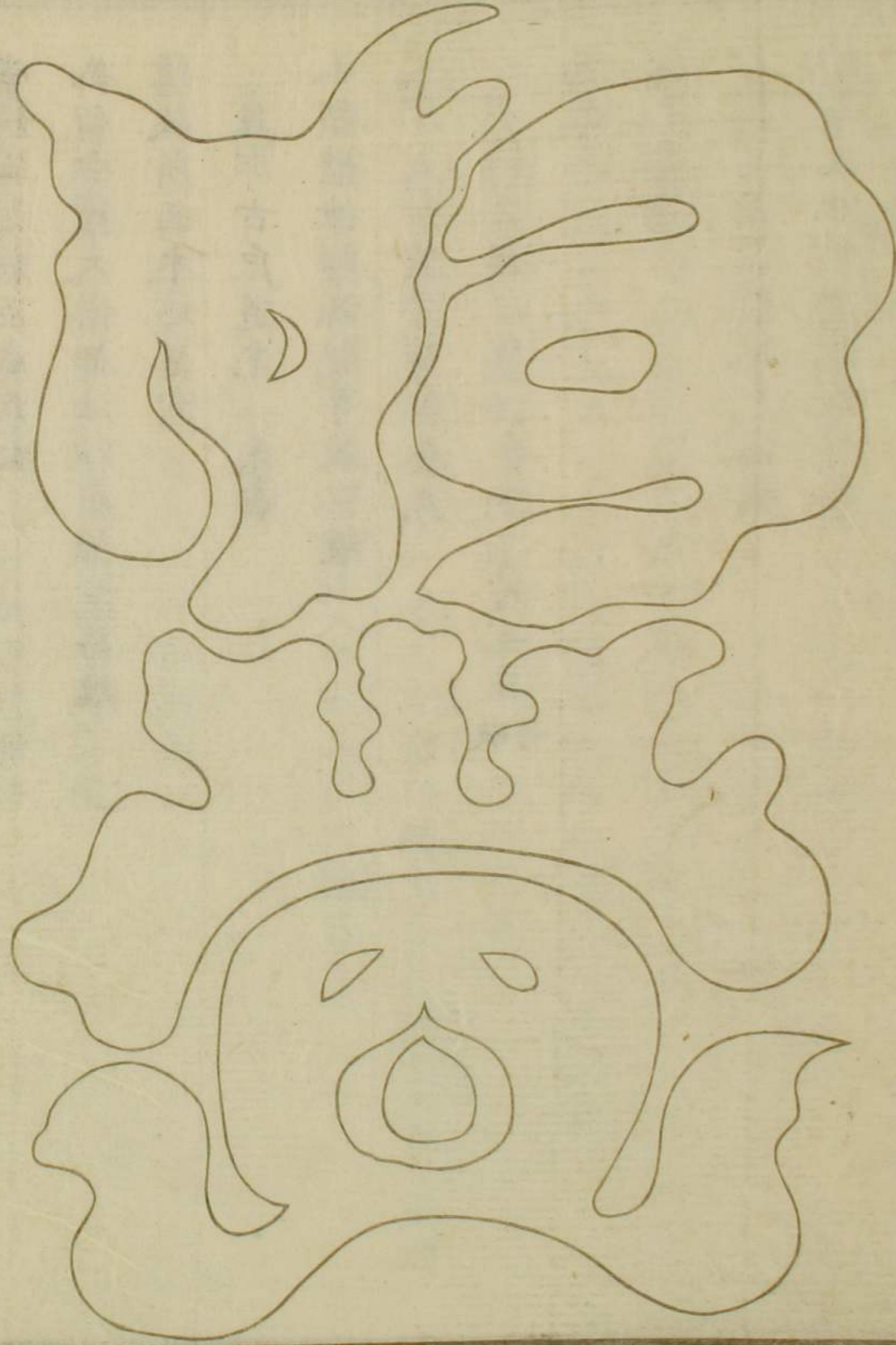
奉施入

往生院鐘

右志者為天長地久御願

圓滿殊者父母覺靈成等

正覺頓證菩提別者者有緣無緣



自他法界平等利益故自本宮

申下新寄進處如件

于時文明二天庚二月十五日

願主 東圓坊權律師昌源

右額 弘法大師真蹟寫淨光寺什物古往生院の額ありとつ長一尺

八寸五分横一尺四寸廻り雲彩言彫毛ハ外縁あり又其内小縁あり

梵字九つ五紺青妙覺門の三字金色を文字の字糸小出せり

向河原 大工町板橋町の方より大谷川の橋を越く向ふ町家ゆゑ

初唱ふ五例の古戸許丈より合満の大門端へ達し爰より鳴虫山

を廻り瀬河系邊への通り路あり牛馬乃通路あり

慈雲寺 伽羅陀山と号し堂三間四方本尊弥勒地蔵慈眼大師の像を

安ん境内凡三口町中真開山を慈眼大師の言方なる最教院晃海

備正なりは遙より寸毫く合満と唱ふは取山内元徳年中行司
の持と

憾拾洲 慈雲寺より西小に尚り川向ふ乃水渡は絶壁の如くなり

巨巖多隙より時立し刺を是にこやあり其奇状なる形勢鬼工の

如く巖上小不動の石像を安ん巖下ハ碧水盤渦しく潭底をうり

如く怪岩横九尺許堅七尺あり平面は憾拾の梵字あり讀が

た

靈庇閣 憾拾洲のこをさある川端一面乃巖石ある下は護广壇を

建て幽遠の絶系あり丸本柱乃四阿を造りけ境ハ晃海備正

草創ふく小岸は七尺餘の不動の石像ハ晃海の造立あり潭岩の

憾拾の梵字ハ備正山順此書也ハ山順を贈大僧正生順の才子也

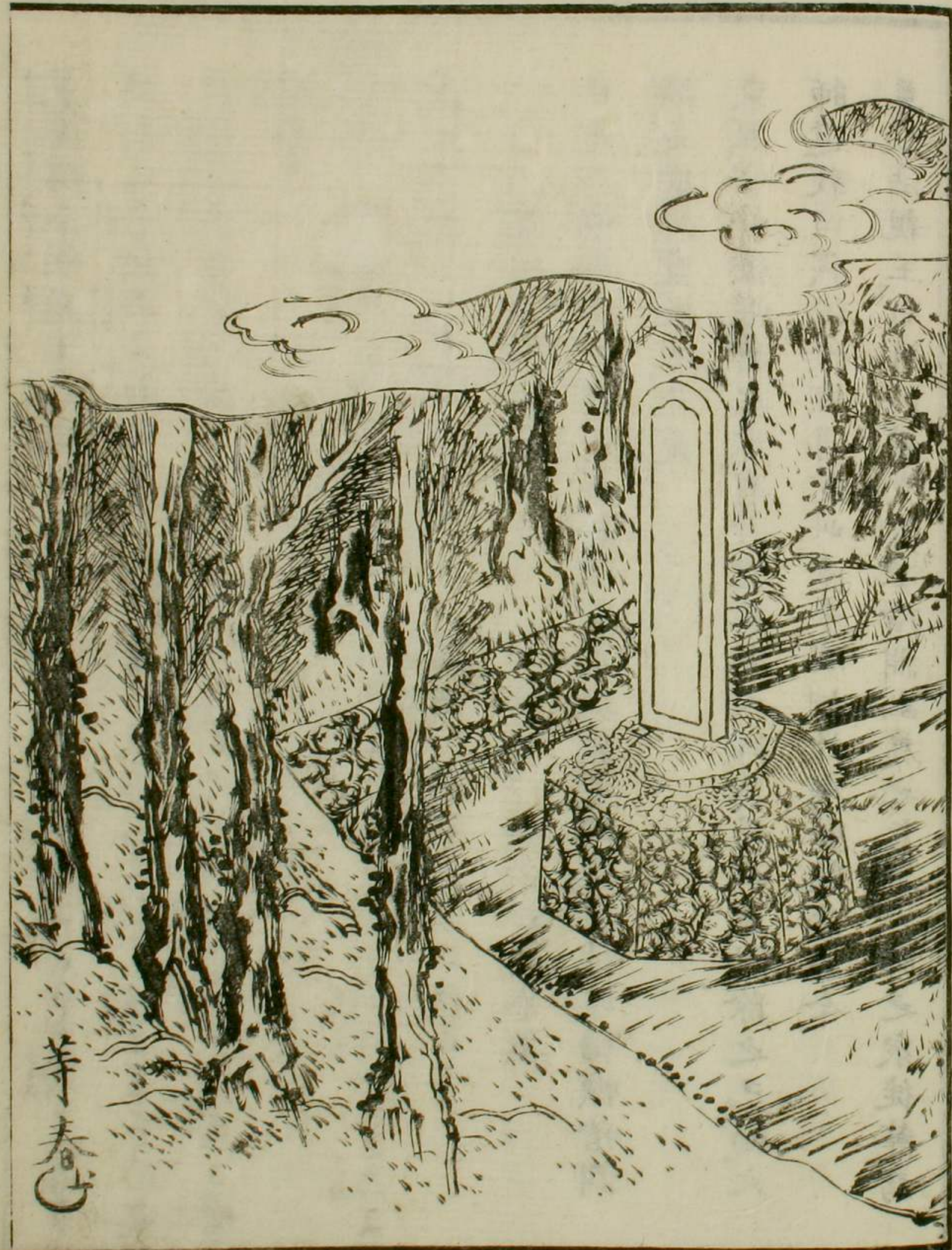
山養源院の三世なり護广堂も同時に建立し一七日護广僧百座



灵庇閣

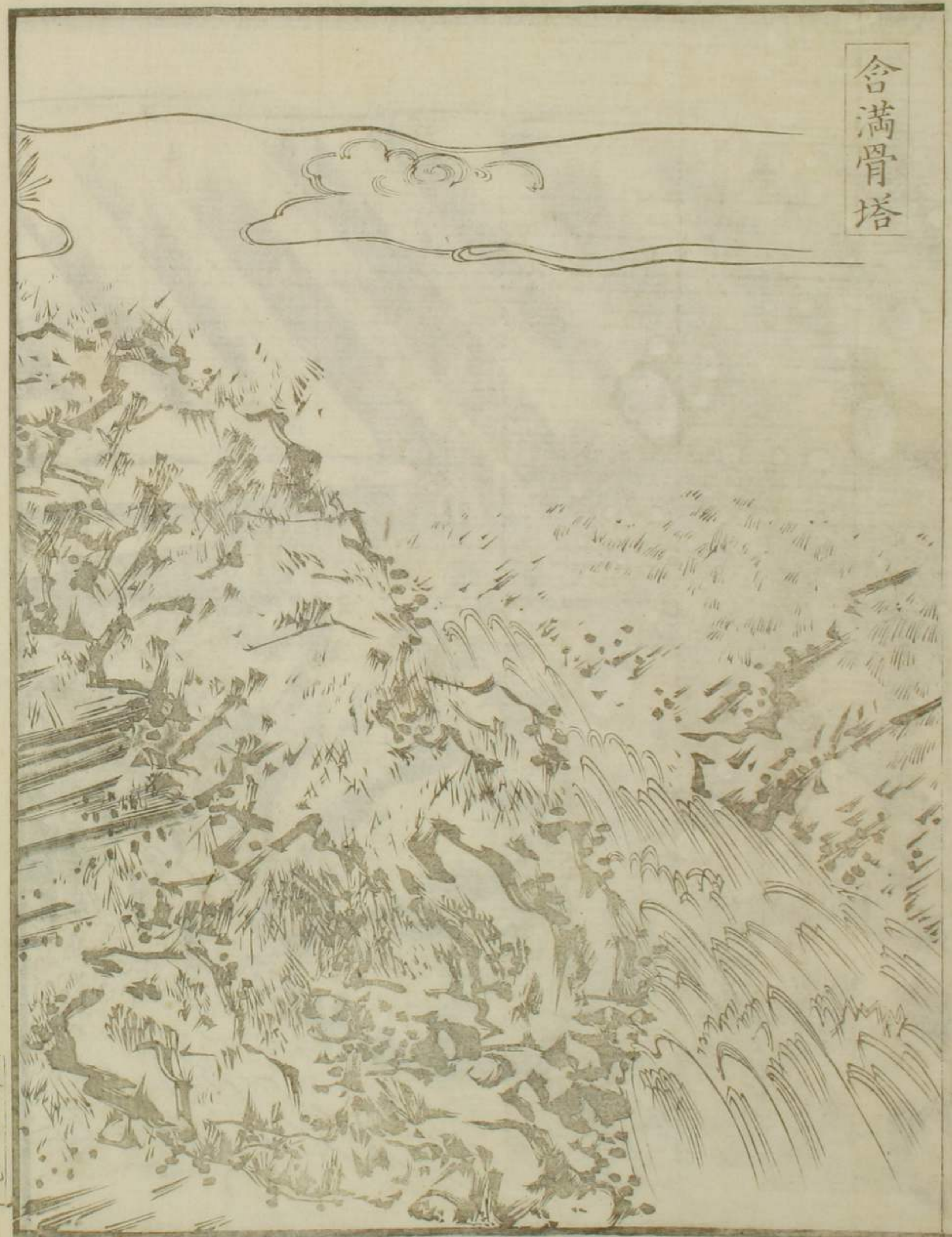


含滿驟雨



羊春

含滿骨塔



三ノ九

是海傍正開闢一山の僧窟修好せしと舊記に見ゆる事といへり
西南の言化石石孤陀乃座像者三尺許ある列し造るるもの數
百体は遙より川岸を傳ひ凡そ町裡も屹岩を踏まれば川岸は骨
塔あり

納骨塔 礎石大に石を穿り納骨すべき爲に
造りしに碑銘石を建てしに銘文ハ林羅山子の撰なり

憾捨淵納骨堂碑

羅山林道春撰

日光山中有淵潭。世稱不動明王來現處也。故採其種字。號憾捨淵
誠是勝地靈區也。先是。

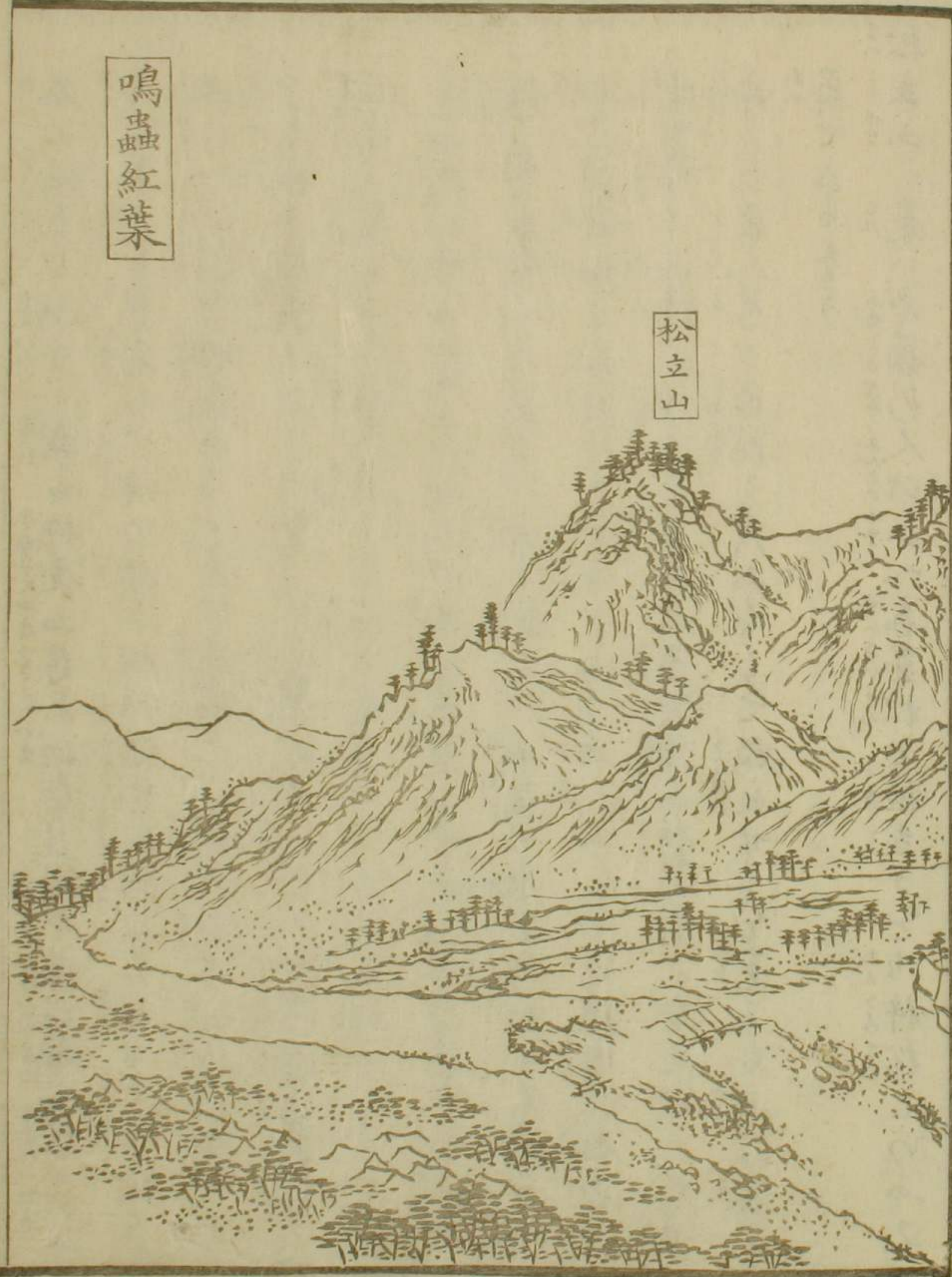
東照宮背後深奧之處。有骨堂。慈眼大師。為畏神威。毀除之。已而大
師遺教曰。我沒後宜再建此堂。未暇相攸。漸歷數歲。方今。
尊敬法親王。有可以營堂於憾捨淵幽處之旨。且大師之衆徒等。為

過去萬靈自己菩提。彫石地藏若干軀。造立淵畔。淵畔有巨石。方八
尺許。鑿開之。以納新舊之骨。乃立碑於此石上。以記其所由。願以此
功德。骨化為水精乎。為珠玉乎。與不動地藏分其骨乎。抽果與佛舍
利相共同乎。骨已如此。則其羣靈。或上天。或成佛。以可證之乎。
法親王繼大師之志。受大師之緒。以為此舉。以納萬骨。不亦宜乎。若
夫葬枯骨則聖主之德也。掩骼埋胔則孟春之政令也。是非非余之
談。聊併言。

明曆 戊戌年七月吉日

通形橋 向河系橋とも唱ふ大谷川小架長十六七間板橋あり板橋町
大工町邊より向河系町へ連れ牛馬も通路せり
崎山 向河系と合流乃後又高里山と東西一貫りけ遙きくの言山
あり本名を大懺法嶽と稱し又小懺法嶽とてけ山の後又あり其峰

鳴虫紅葉



松立山

鳴山

鳴山

二宮山



名を稱する山多し或は杵立山月見山など皆冬峰行者修法を以
不たり又を屋宿も此峰の續き相好灘室形灘とも稱する所あり
此山ハ紅葉の勝景あるをりて尚雨の八系此内も入らざるを
備古木乃替翠する所を何れに雑樹乃宋山あれど時々雲霧を起し
け山は雲生むる時を果し雨を悔くするよ名附くより一
しも此れ峰といふは何れに此を系世すごとくそのゆ名言ふ山を
指くなきむしといふは或る鄙ある俗言に嬰鬼乃初もこれを啼
出と我鄙語はあれむしと叫ぶ何れけ山も一日此内に幾度も
雲を生し雨降ると時々なるゆ名を浸ふ松へすとなれむしの啼
出とと土人等が雨降ると或くして教云せしを堯る山乃名と
負せしむるなり

松立山 是ハ冬嶺行人け山へ毎葉松を植立ると杵立山といふ又

一名螺立山ともいふ奉々二月廿八日行人け山を標を吹立ると
あり然して此松之木を植立ると天下泰平の傳はるる種々
傳秘ありとけ里相行人乃標を聞くと竟後本院にて古より傳來の
候法とく細き者竹長八九尺上小扇之本を固くするさぬ丸く
結ひ附其扇の結付する所より白苔を長く垂せり是を石の所香
居前の清水流る所へ之木が溝の両側へ立るなり古より町敷乃者
後本院へ扇と竹と苔を納る事ありと其町敷影絶せしゆ名今ハ
神石町此小間物商人の路ある所の故とて出せり憶く二月朔日
乃未ゆ小松立山あり其松を燒ともいふ佳古ハ所松協ハ相好灘と
今の松協此所の峰なり故に古より今の中古より今の山上へ移るといふ

- 日光八景
小金春曉 鉢石炊烟 合満深雨 寂光瀑布 大谷秋月

鳴虫紅楓

山菅夕照

黑髮晴雪

小倉春曉

大明院宮公辦法親王

小倉山色似皇州不嶮不夷沿水流花氣氤
氳天未曙紅霞一片入雙眸

鉢石炊烟

朝鮮國聘使副使

任守幹

山下孤村遠炊烟一抹青隨風濃更淡樹色
晚冥々

含滿驟雨

同 從事官

李邦彦

深潭徹底清潭上蒼巖古下有老龍潛時々
作雷雨

寂光瀑布

同 正使

趙泰億

炎天樓閣欲生寒千尺飛流落翠巒時有遊

人來入洞錯疑雷雨門林端

大谷秋月

右同人

山前秋水浸山平涵潄冰輪徹底明聞說高
僧常管領心將此境

鳴虫紅楓

任守幹

仙山秋色晚琪樹尚青葱獨有楓林冷迎霜
葉盡紅

神橋夕照

李邦玄

墮草傳神蹟靈源路不迷畫橋留返照虹影
落前溪

黑髮晴雪

同來聘製述官

李 磻

路絕懸崖不可緣雪花寒逼斗牛躔茲山亦

作瓊瑤窟積縞休誇富士巔

妙道院

寺北の辺今糸町と唱ふとも古名は道田母沢と号す

寺號ハ佛龍寺と号シ寛永六年天海大僧正岩谷へ建立シ給ハ

今境内ニあり釈迦堂ハ昔より中山に在リと元和七年中山より佛

岩谷へ移シ其後寛永十七年今の地へ妙道院ととも小移シ其

といふ其初より一山乃香花院と定めらる寺領貳百石を附せし

末寺ニ拾伍ヶ寺あり本号ハ阿彌陀を安と

釋迦堂

南向西間は面赤塗寺の西北方より本号阿彌陀昭士文殊

普賢本座像外より二号の阿彌陀是ハ惠心之作といふ堂内右の方に

慈眼大師の像あり是ハ大師現存の肖像とて安並ノ勝道上人ノ

位牌を安と

石燈籠

二基釈迦堂の前より一ハ加藤左馬助と刻と又一ハ石川

主殿以奉納と銘あり

慈眼大師ハ寛永廿年十月二日東叡山より入寂したる日同六日

靈棺を出し同十日當山座禪院へ入す同日黄昏時遷妙道院乃

釈迦堂に安し一七日の間に法事あり曼荼羅供を餘修法早同十七日全身

を大黒山の石室に奉納歟云々

撞鐘 慶安二年霜月禱成銘文在ふ出記

日光山妙道院

釋迦堂慈眼大師尊前息苦鐘一口

右當堂者慈眼大師草創而

東照宮兩部合躰之靈場也云下略

願主當住持三代顯密職位豎者法印天翁欽誌

殉死墓碑銘 五基釋迦堂の西より初合之側より其墓ハ一の例也

等春



素麪龍



玄性院心隱宗卜大居士

堀田加賀守紀朝臣正盛

芳松院全巖淨心大居士

阿部對馬守阿部朝臣重次

理明院光德徹宗大居士

丹田信濃守藤原正信

靜心院一無了性大居士

三枝土佐守源守惠

真證院理哲玄勇居士

奥山茂左衛門藤原安重

以上五基の背面小慶安四年四月廿日とあり同

諸墓碑銘 十一基二の側

高林院俊庵宗德居士

松平右衛門大夫源正綱

白林院直指宗心居士

成瀬隼人正藤原正成

正信院安譽道輝大居士

竹越山城守源正信

釋性順居士

高木主水正源清秀

正等院道宗圓雪居士

天野彦右衛門藤原忠重

寬永七年四月十七日

源盛院道立心圓居士

中山備前守丹治信吉

現龍院輝宗道翁居士

稻葉佐渡守越智正成

清庵源光大居士

板倉内膳正實名不載

心空道喜居士

渡邊半藏源守綱

光照院釋道清居士

渡邊半藏源重綱

了華院道宗居士

諏訪部惣右衛門藤原定吉

是より次ハ云の例なり碑七基

寒松院權大僧都法印衛賢高山

從四位侍從伊賀少將藤原高虎

從四位行侍從兼伊賀守源朝臣勝重源英居士

從四位下侍從周防守重宗建

寬永廿一年七月十日
宝地院前拾遺穩譽泰翁覺玄大居士

寛永四年十月七日

大性院月桂宗識居士

寛文三年七月十六日

空印寺傑傳長英大居士

寛永二年十月廿九日

大雄院永井月丹居士

寛文八年九月十日

從四位下信州大守大江姓永井氏岷山居士

姓名なり
按永井尚政の碑あり

右の石塔釈迦堂の西乃方小二河に立あり

大牽地尊

系町妙及院表の双び及際小牽ありお並く堂に小庵もあり

縁起の略云尚堂北地と姓首勝道上人當山開闢の初男群山へ登

らせ玉小川に田母沢の流は険しく習ひ玉小川に御細く玉小川に

玉小川に忽然と地を裂け玉小川に上人を懸論し玉小川に

因茲大同年中に淨の直家と石地を築き玉小川に玉小川に

寮坊とも小建玉小川に香花燈のをかき玉小川に日教勅行

土井大炊頭源朝臣利勝

酒井備後守源忠利

若狭少將兼讚岐守源朝臣忠勝

永井右近大夫大江直勝

の史記に據りて後三徳年中再建玉小川に玉小川に

移し玉小川の初名は後堂と安んじ玉小川に玉小川に

玉小川に延命地を築き玉小川に玉小川に

道蹟險難ありて老弱の寄安と玉小川に玉小川に

玉小川に玉小川に玉小川に玉小川に

玉小川に玉小川に玉小川に玉小川に

玉小川に玉小川に玉小川に玉小川に

玉小川に玉小川に玉小川に玉小川に

玉小川に玉小川に玉小川に玉小川に

玉小川に玉小川に玉小川に玉小川に

玉小川に玉小川に玉小川に玉小川に

玉小川に玉小川に玉小川に玉小川に

了そ猪るゝめ大に負る地務るゝは盡れとて毛を結ば是を試
殺し見物せん疾くと命とけを從者ども忽に堂上より首像を
出し彼大に結ひ合せ湖の舟へ投入り大に人種小驚死を俵
首を揚ぐ湖の面へは又町をうり引けり其時監兵從者もも
打り知ひ河邊地務るゝ大に引るゝと一度は聲を揚ぐ知ひ首像を
不思議やけ首像忽ち水中より起せらむ大を引て元の岸へ牽來
らせぬひたり將監を出て又湖中へ突出さんとせし又俄に
方に雲霧おこり目定もけの尻お監を始從者ども五折すゝ
初くと成ぬ血を吐て向絶けり折其處小樵丈とも居た
りしがけ体をもろく畏怖し急ぎ中禪寺の別所へ告げを居合せ
し僧侶走り來りて先首像を湖より取揚彼大をこけ放せを
大にすゝさぬ焚くを諸僧侶等後法樂一派を謝くれば皆おて

雲霧も晴るる將監兵從者ども五折初るゝ漸起揚り實小夢の覚る
こゝちとて羅過を懺悔し地は伏しけり山あて言ひし教生をすめど
誓願しけりぞ歸りけりとせん是より此首像を大引地務るゝ中なり
まより墨表を經る元祿年中藤原秀貞といはるゝの信心乃終まじ
中禪寺湯元より河守等の依託を加へ尚堂へ移すり誠は盡
無双の尊像なり委しく縁起も見る也
禁形石 土人呼ぶ禁形石といひ或は教生石とも唱へ皆略語して呼
ぶことなり實を教生禁形の塚乃碑あり龍尾並津堂山より乾
崗り廿町後山より建り是より外を教生若くうゝぬゆ急げ碑より
十町後山より様師猪麻を特式いふ屋と唱へ居て居て秋は山中より
出る鳥成捕るゝ本の枝成聚るゝるありしを齋をぬり為の体まん
とすゝものを捕とみく春と四月以より山中へ入時も又捕と世後と



其石を多登と唱ふ扱け禁石の池ハ僧侶山修りする禪頂
なるを落茂西山の方へ小岳山を登り詣ると七龍の飛流する所を
色くををり

七龍 七龍ハ福前川の水源なりされども河に随く流る巨嶺多く
荆棘道を塞ぎ山峻谷深く流れ急なりがて深く谷間へ入
ほど布て流の形を失ふゆゑ救生石乃道をとばす色皆童山
みて小岳系北山峻一里半程先で四方固く東の方十里成を流
愛ハ女顔山乃續き登り下を登り見れを鑿削するゆゑ絶壁
ありて多あり北の方に七滝あり瀑七ヶ所より流来る水勢凡十丈或ハ
十中八文許りありちんとは見ゆれども其下ハ水相濁くくく測
登りては湏臾に雲霧盤渦出くく中ハ滝も又見ゆれなり
け色ハ容易にぶる處に境より流るに實文中中霖雨の次候ハ

洪名ハ激浪山乃如く福前川へ流る未なるゆゑ人衆救済流亡
溺死のものも数多あり由其後ハ河系地となりたり土俗等の云
傳ハ芝草山ハ川を七流の現くくと思ふて妄証の説あり
當山古縁起等ハ載て往古より七滝現在ハ今にぶると禪頂行者
の拜所ある由をゆて

如宝山乃蔓延松 姫小松と稱する又系なり山中に多く生を是ハ
如宝山北ハ裏より山上より凡八町をりりが間を以て續き南へ三
谷を越え北へ七谷を蔓延根株乃在雨者も一本のものと
す急あり形もなひ直なるゆゑ實又名木といふ處ハ峰候なり
杉人け松の枝上を渡り禪頂なる道なり未だ北長松ありけ色
為人乃往見る處ハ一木あり禪頂候なり僧侶も語り又を採茶と
業とさるもの等ハ小話に傳る事あり



如寶山の靈松

飛鉦子 このきざら け器物ハ男辨女顔そ外言山に在石室ら辰逢く峰修好の
好人も此器を二三年見ざるにありといふ形いちひさ兒鏡の鉦子
み似る蓋もたれとある由是ら山鬼の好く玩とするもれあり
といふ

二子山 ヤチノミヅノ 八雲沖抄藤壺系にも下世とあり或をいふ下世の山とい
むべたれど尚不此山といふていありむとありこれども古くより
尚新小二子山の名あり土人も傳へいひて寂光荒伏の山續小二子
と稱を源山ありといふと目ふ立る山もあり辰おの是考ふる
男辨山如室山乃間又大真子小真子とて二の山二麓の冨小吃立せり
真の子なる藤壺がね並びこれを見らん尚石の二子あること知
くれを慥に先を二子山とてそおとありむ
下世に居りむは女は形見よそへくきくなる

後撰 別 二子山 ふごやま にもいふに赤尾松と檜鏡をこ形るのぎを尋てぞや。
六帖 下世や二子山乃中かありむは人をききのとあるの南 森撰法師
集 信明
名 信明
音 信明
日 信明
不動岩 ふどういそ 福荷川の氷岩なる山麓あり其形勢の似たるゆ名附
なり言ふ文許あり
搗子岩 うすこいそ 是も前との續きにあり田舎りて稲穀の粉を搗りくる白を
搗子と唱ふ是も其形乃似るより名附く大に二間は方許言六
冨石あり
凍岩 こわいそ 是も前との同石岩の凍に似るよりあり六月乃冬天をけ
石の岩穴小氷あるゆ名附きり一面の岩石陰地あり巨岩りく



不動岩

スルスイハ

中
ッ
園



三
六
三



素庵 韶



凍岩みて氷を
うぐつ圖

ほも重り空の如く漸く凍く洞其岩間へ流る凍るもの
炎暑の初夏より氷を凍りて賞玩す

外山 稻荷川を踏く良乃方に直立する二町許の孤山を才腹

より上を巻嶺巖山多額を打て宅を和り頂上を毘沙門堂並に

竈屋あり皆岩の掎角に造る山より尖頭あり堂乃廻り又松楨

数根岩間に生ひ茂る東の方を望めを壬生寺於之を造る遠天に

見ゆ正月三日を縁日とて法人系詣あり此地を

將軍系 済泰詣乃初に花園場をて遠望臺也

興雲律院 外山の麓にあり天台律なり享保年中 済座主

宗保院宮准三后一品公寛法親王所用基用山玄門和尚境内杉樹

陰森り幽邃あり遠く眺むる園薑園の額を掲ぐ 座主乃

宮乃済保第一切経苑あり茲もと覚宝苑の額何を是也

公啓法親王の済保佛殿小威光殿乃額を掲ぐ

准后法親王の済保第一切経苑あり

荻垣面 此地をりと稲荷川邊に在る荻垣町といひ寛文年中の

洪お小流失し其後同町の相地面に住するゆゑ今荻垣面と唱ふ

猶も成土人等附會の説をまゝ市面といふを傳へ半欽堂の

古き面一川天より降りりゆゑ半欽堂と地名せりといひく

俗説を傳へり 済神領村名寄は外山村と出づりり此地ありし

済茶亭 荻垣面より東の方 済門主の済方此沙別荘をり春は小

倉の妻産を賞し秋は連山乃紅葉を望む佳奈の地を系極黄門

の小倉此山莊に擬して設るありや

漆園 是れ小倉山の續き時次川といふを越る其上なる原野の地

あり色をりし漆成植付たりとど原野の續きゆゑ年々此火乃





等春

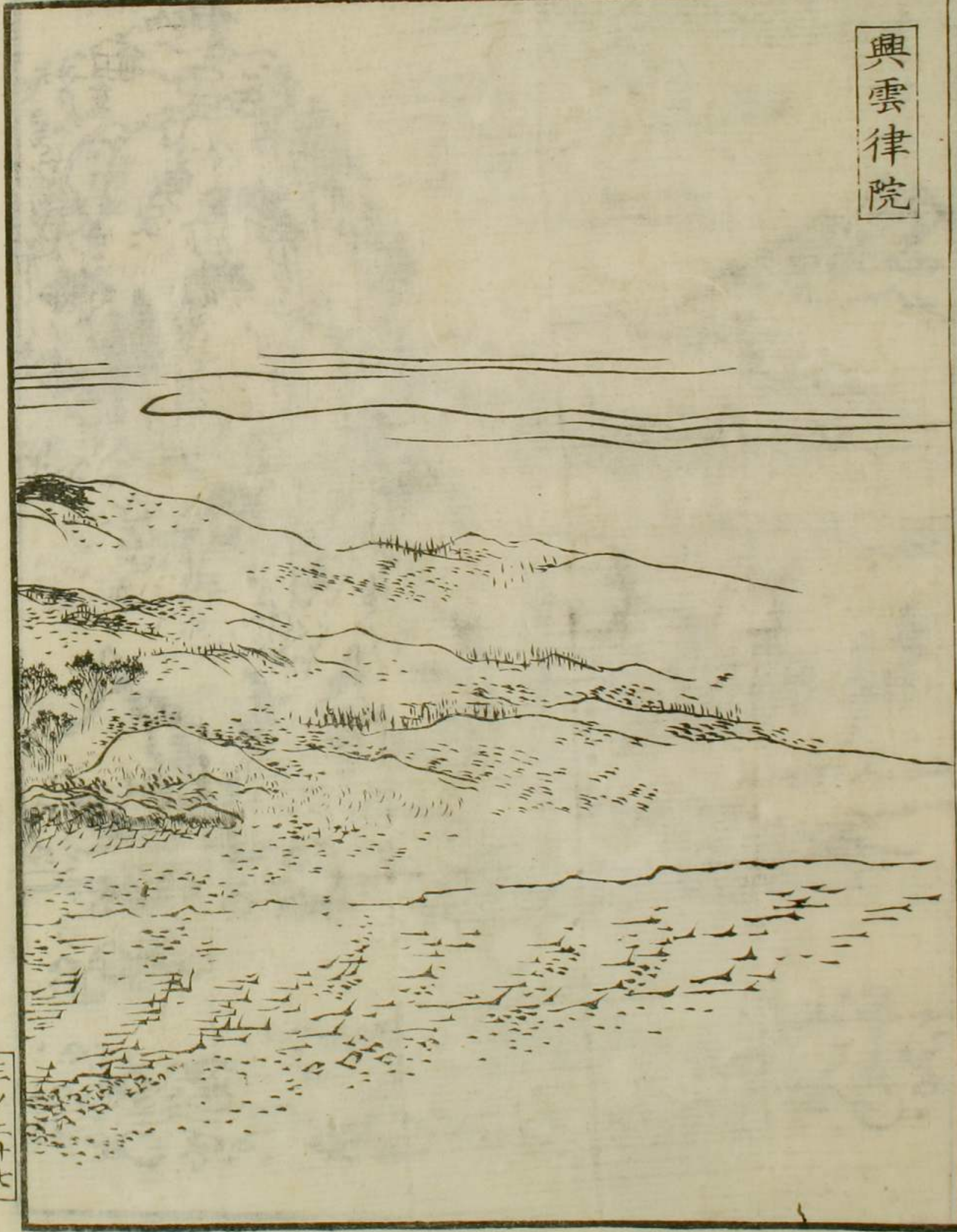
外山



三ノ二十六



興雲律院



為多多く枯うせり

小倉山 済茶亭より東に續きううぬ山ありて峰は松樹数根つ

なれり済茶屋の口迄も松樹さうえ芝生ひ茂り

霧降龍 小倉山北麓を通り山北山合を或と登り或と下り凡一里

峰を經く山路ふかりまよを渡のりて坂路一町下りて為来る

瀑布を登ふ言ふ六指間もあべさ山より流す水沫数級の岩

石より滴りてぞけ教びらと烟旁のやも多し秀降乃名記すりて

迎き

將軍家 済系も何れせらと帝は初らけ瀑布とと 済遊覽家

させらるるこのあらんやとのえあひみく瀑布北あきうに

あふ樹木悉成もらひくを山の上よを教級の流流をほくせりそ

図を次小出

生岡大日堂

街道七里村の西に方の路傍に小阪ありて生岡大日

道と銘ぞり碑石あり其西より左へ折る路を登き丘陵の地

なり爰は上新村の地にて大日堂乃辺を生岡と唱ふる村乃小名

ある處一仍り里人等上の大日とと又を生岡の大日とも唱ふ

此所に大日北堂地悉古木乃杉森りて堂地入は左の方小列樹七

八本皆大さ丈餘あり右の方の極の古木並び立ち先より大日堂

向ひ六七間堂に向拜附之間は面積は本号は弘法大師の作といふ

堂の後と接して老杉樹北大なるもの七株を二三株ハ殊々大樹

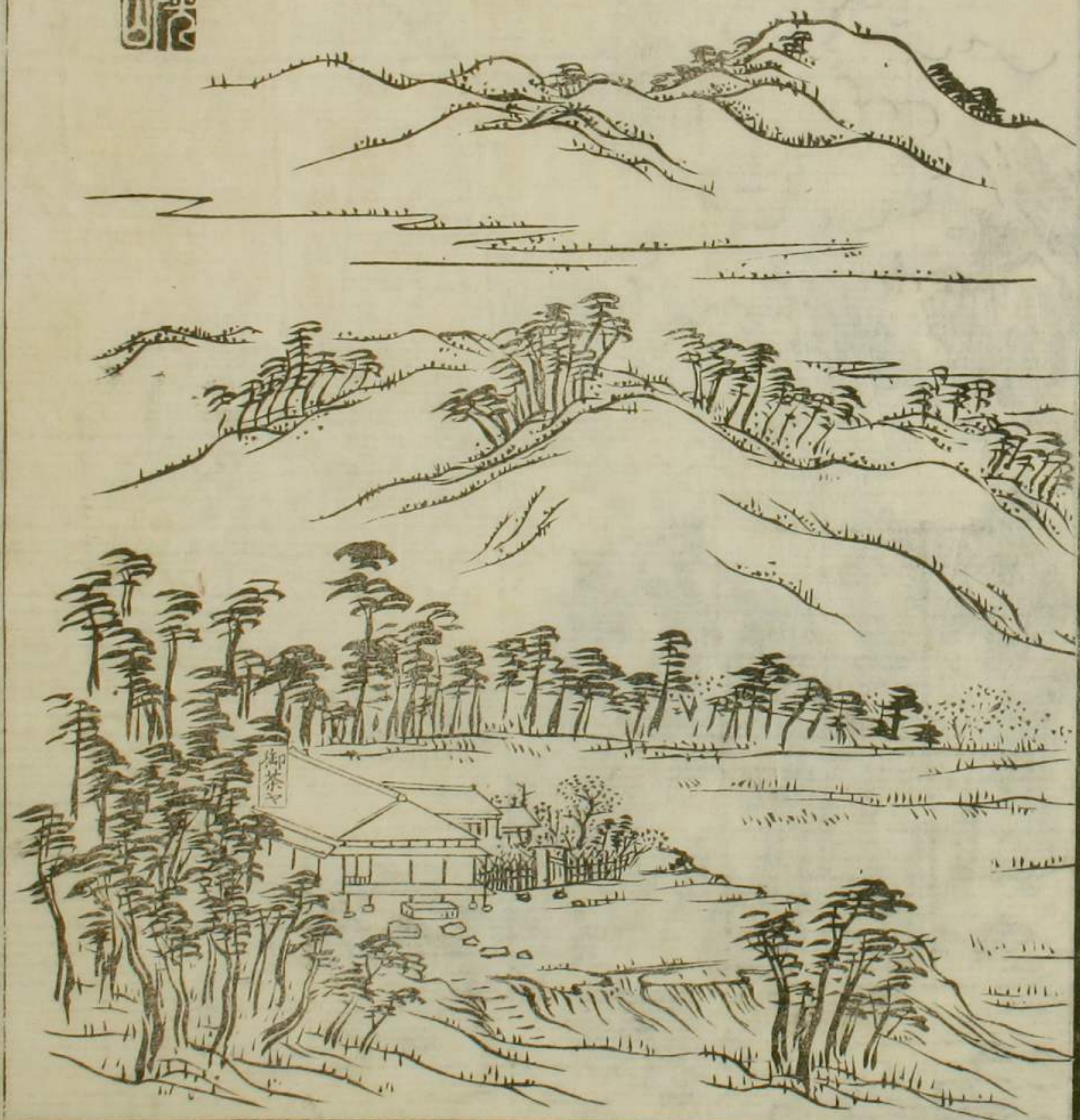
あり凡丈八九尺も周廻ある處一紅葉地は垂くうさぬハ屈曲

して老杉に似たり堂地の南を平坦なる高地あり隣邑の野は北

山王峯の麓まで陸田はけり借く開むハ爰乃大日孫小五

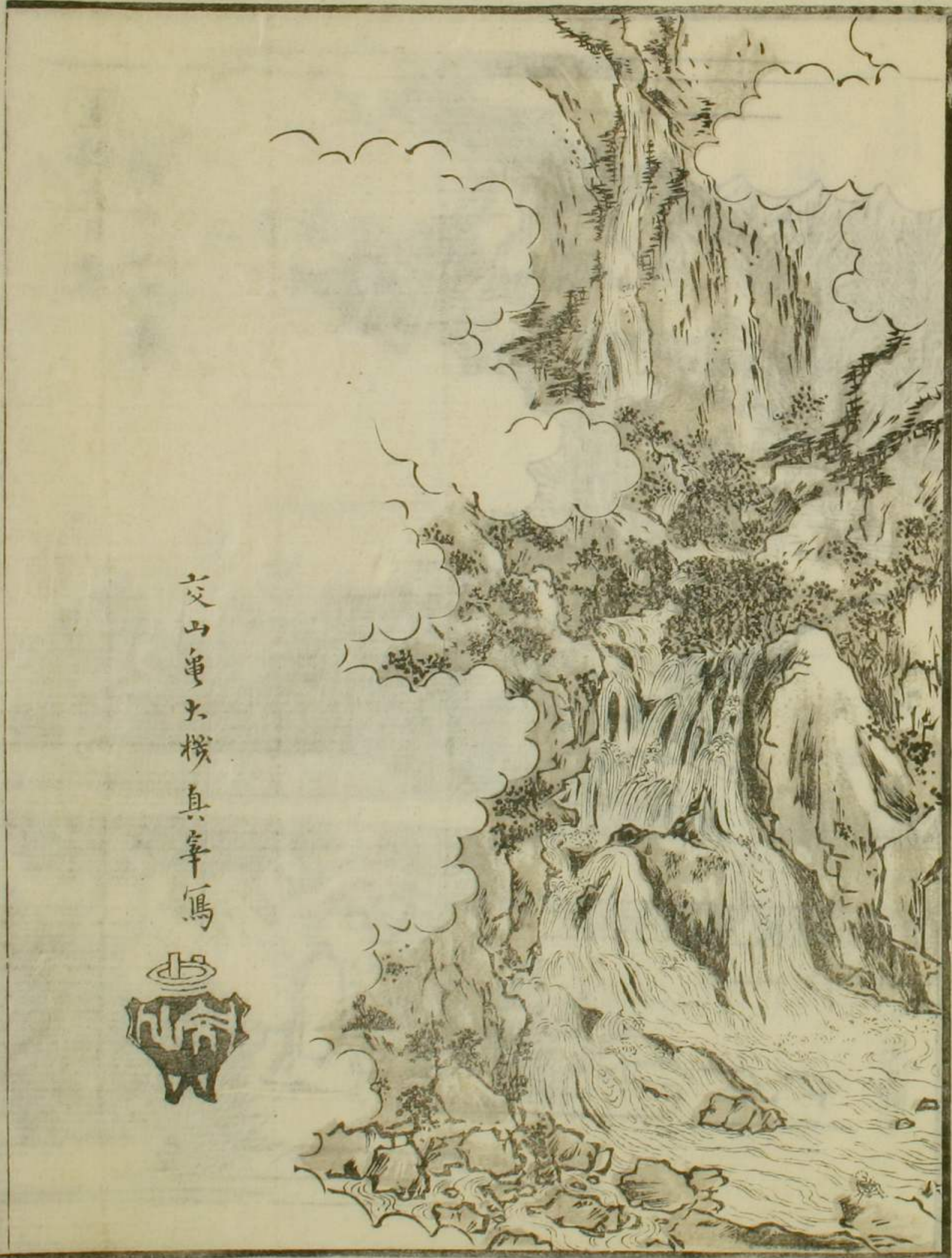
社も惣島の地ありて別尚不其修坊舎あど教宇ありといひ傳ふ

狭山亭



小倉春曉

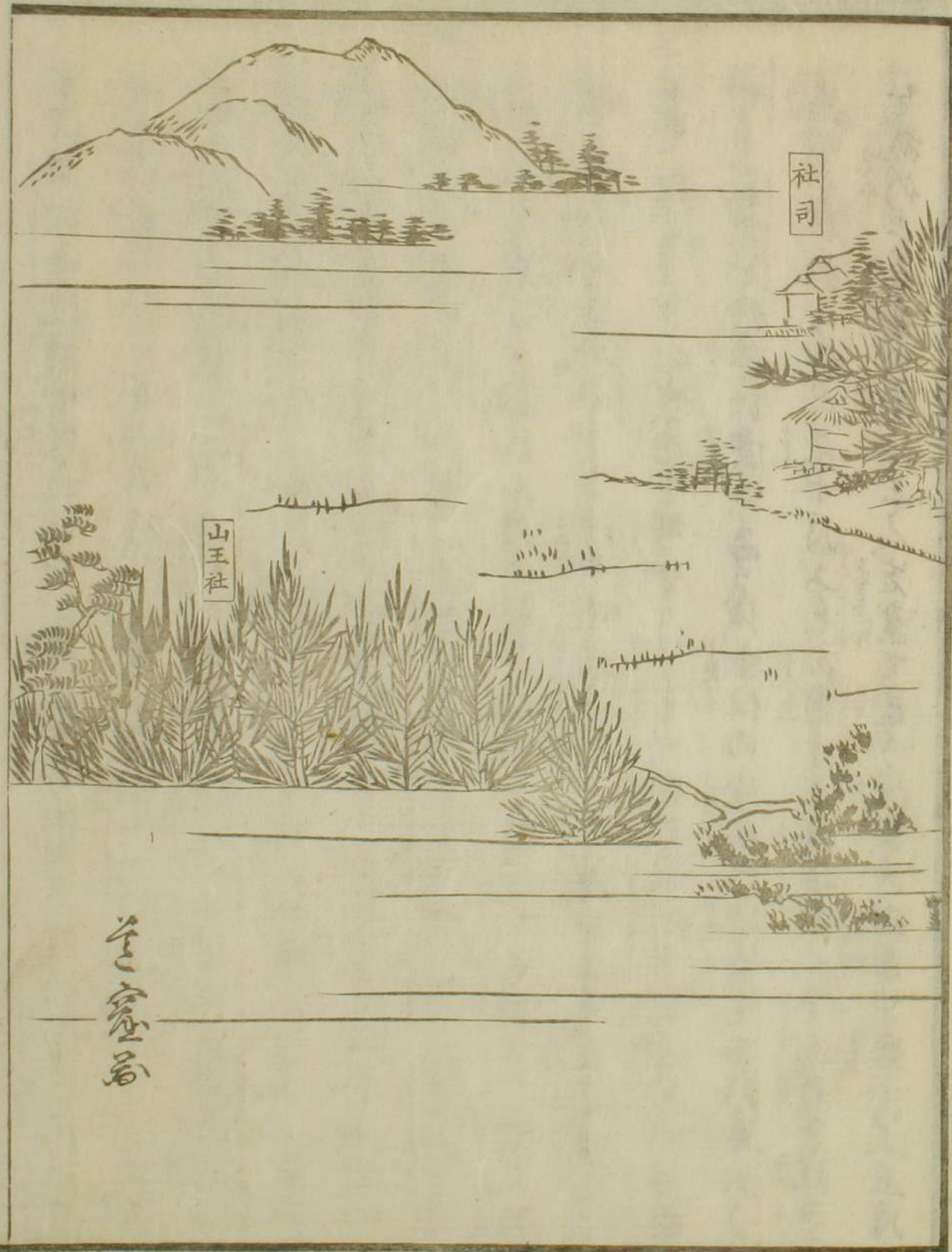




交山魚大機真筆寫



霧降龍



社司

山王社

生岡大日堂



生岡大日堂
野口山王森

大日堂

七里村

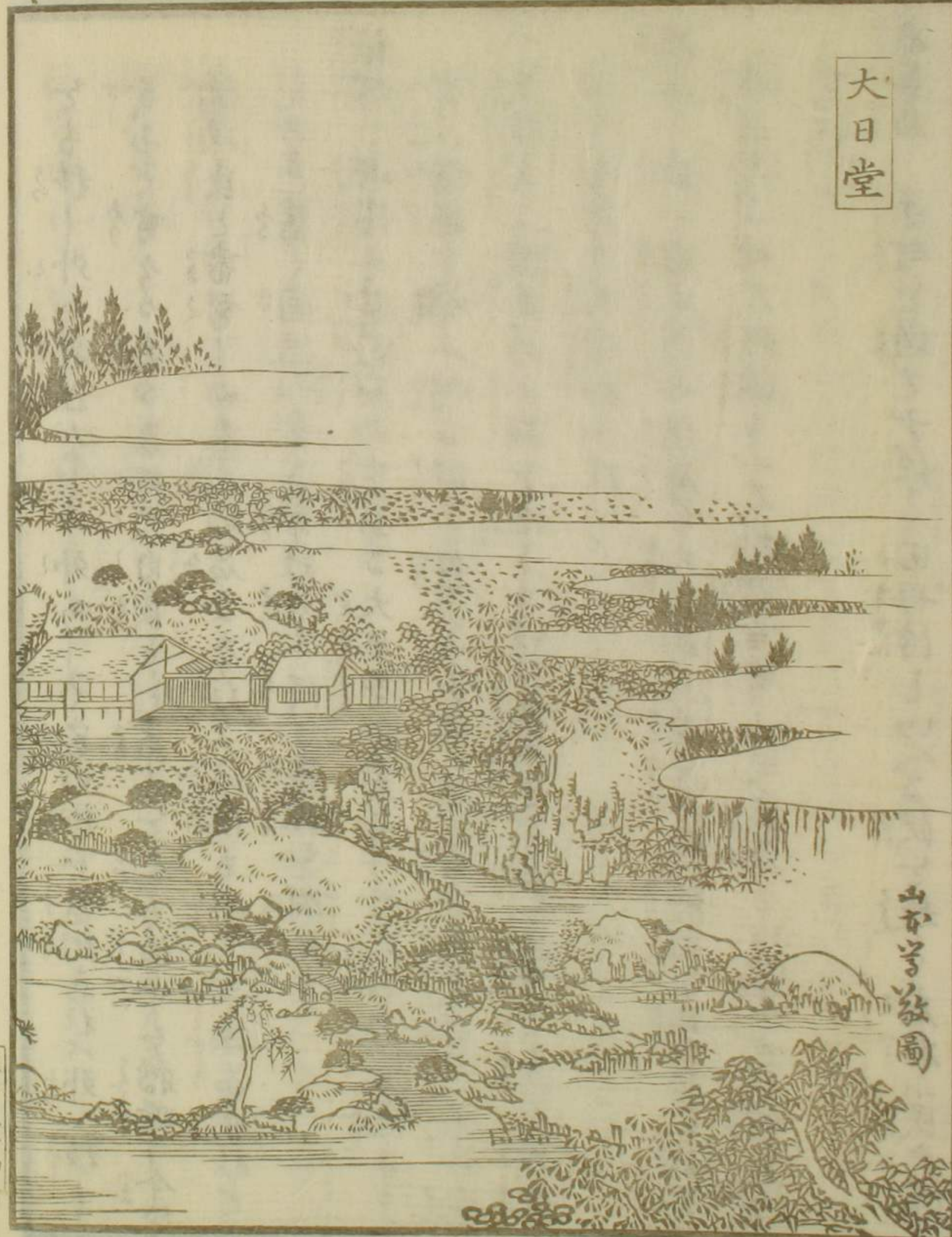
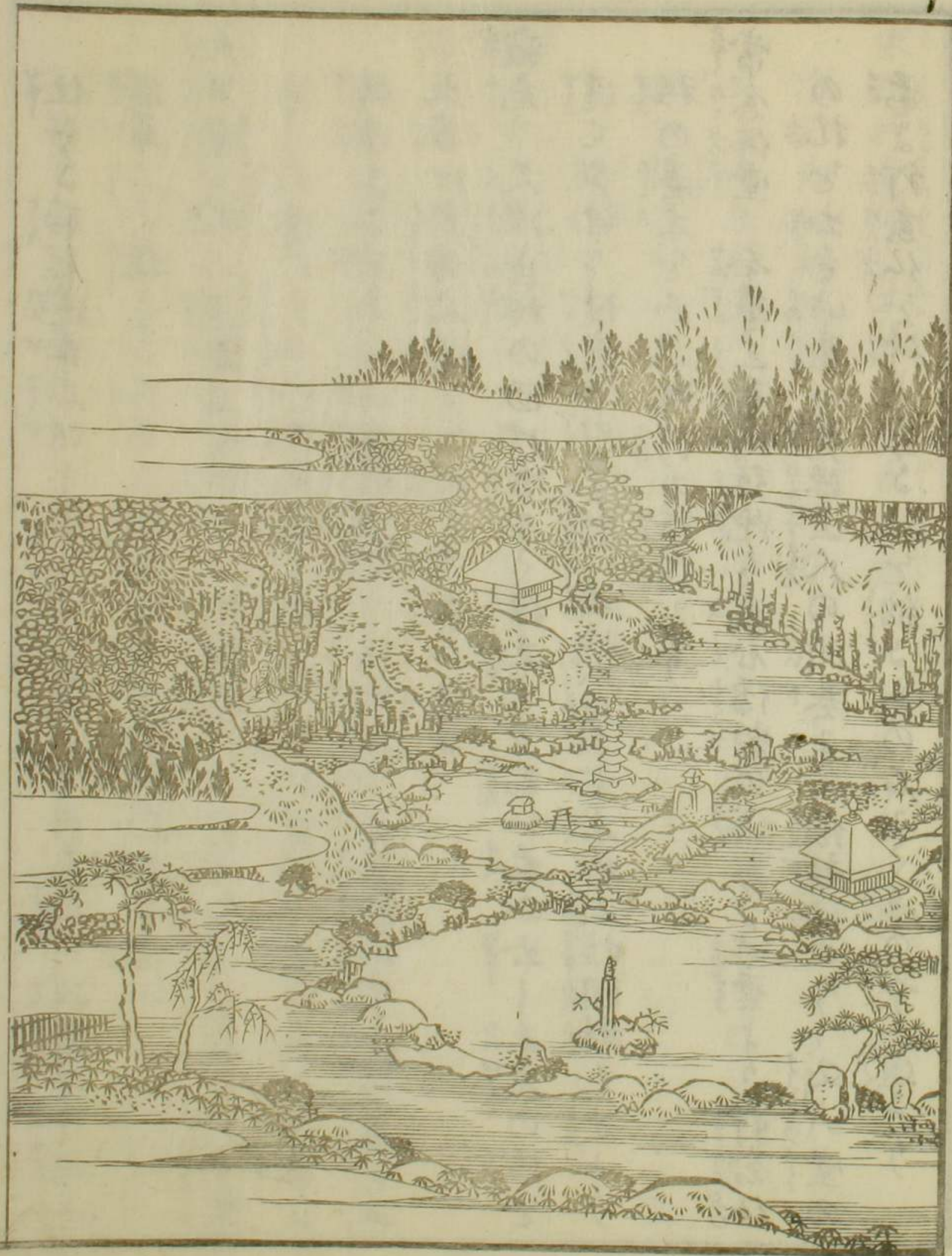
三ノ三十一

是バ其以寺院坊舎等のあり一舊迹まであり一あん又云大日堂
開建此奉ハ弘仁十一年弘法大師二荒山へ初ニ禪禁一玉ハ初
爰ハ二荒の山麓あれを先け石小揚を停むハ大日如来此像を
刻せられ草庵を營之安して誓け石小揚を法を修せしと云其
後に玉リ堂宇莊嚴又營造一別尚不あども阿等一と也也然るに
今も大日堂此存する能くされども古木鬱茂せしむるぬ跡ある
事ハ知らせし今ハ正月八日を法會として日光山内より堂荒出
仕一々法會成修せしむ此日道俗系詣一々群をふる古の故実あり
とてねた下きの案内と号する事ありて村の民庶皆寄合芋の湯煮
せし其のを行串に貫きある成出仕の堂衆乃答應とある事あり
其のこれ初く是日又十月五日ハ山内より僧徒三人下向あり法事
を執りて金堂の承仕三人先達てあり法事の教華を盛とて正月

十月にもにけ地乃後とて元僧往反の傳るを初むといひりま
村名を七里と名附一奉ハ山内神橋邊より坂東及七里あるゆゑ
稱する由里俗の古き傳へあり
尾立石 大日堂北乾の方八九町もよあり昔を郎阿神大蛇と化
玉ハ山嶺より飛來あり生岡山の頂あり尾をまきまよ宇初宮
の丸山へ飛りありといひ爰乃磐岩ありと里又の俗後ハ傳へ
山王社 是ハ野口村の北七里村ニ隣り生岡山ハ相接を大日堂より
東の方より峰を分きり本北十一面觀音あり傳へ聞嘉祥元年
慈覺大師乃草創して山王を勧誘しありといひ毎年十月十一日
大日堂の法會修りけ神祇に法華八講執りあり一が故をて中
古ハ山内より僧衆三人出仕せし是三問一答の論議あり是も
承應年中より僧衆の出仕も絶く一坊堂衆ハ今も出仕を勅といひ

往古ハ山王の社僧二十一坊舎を有る社院の南北地を懸下る寺を建
立し社役を勤め又大日堂をも兼持し之のゆゑに地盤榮へ日光
同宗此事あれば支配せしむど別揆を立んと欲し下知は癒せざり
ゆゑ山内より押寄て坊舎以下悉破布しけるといひ又ゆゑ大日
堂の法事山王の社役も日光山にて修し來たる事とぞゆえり
久次良村 古に久自良と書し由來ハ蓮華石村より東にありて
山より西にあり又西に寂光北山林入は西より南に荒海の
嶺山續き東西凡格口八町南にあり又七八町の内を久次良村と唱へ
北寄の山際ハ 沖宮の社家元ハ人住し其餘村民等とあり皆山
乃藤は教住を由より南にありて山下に大抵國を稱へる
地あり諸久次良といふハ日光権現に附く謂はる地ありともゆ
往古神社を宇都宮へ移し奉るゆゑ彼土に外久次良といふ地名

をも移し外ハ外山をどの外にありて爰の地を舊地と云ふ外に移し
てありて有る丈ゆゑ外久自良と書しを是も後世に傳へる
徳次良と書習しゆゑ人の名をなかりけ説も正しき據ありれど
かの色舊く聞傳へる事は正し傳へる愚按を附せり
糠塚 此塚も蓮華石の先ある大日堂の南にありて大谷川を隔り
里人糠塚と唱ふ何れに寄る築たるものありて其末由成其小近
末家上は稲荷の小祠を祀るといひ又其邊に石を覆く多く積置
たるもあり其謂はるは
池石 茲ハ寂光の傍石の大さ六尺許上を滑りて凹
形三尺又四尺程深さ一尺餘或は号して生石といふ早する時湯
蓮華石 系町を通りすはる田母津といふ川を越り左右に民戸連



大日堂

山中寺院圖

住する所を蓮華石村といふ其村名のおこれる所を往來のた例ふ
蓮華石と稱する石あり謂ゆる石ゆゑ此の石小嶋

大日堂 前の蓮華石を遷す二町餘のたの方へ下る坂路を石小堂

あり石像の大日如来安し傍に一字に寮あり南に命ふ庭前

清潔あり池あり冷泉地中より涌出し下底皆砂石を此の廣さ五

六町四方古木繁えて枝を四垂ふ垂る

寂光 久次良村の西北方あり往來する所い前ふ出し平原の地を

遷てゆけり境内へ至る大門踏北入古本の大杉相對を主より

杉の並木を六町餘を境内あり

常念佛堂 本尊三尊阿彌陀と惠心僧都の作あり此堂より釘念仏

の札を出し此事い覺源上人の開基して縁起に之り又此堂の

前釘念仏を修しある札を納する所の石を函の如く造る

求聞持堂跡 本尊虚空藏并慈覺大師の作といふ此堂の額ハ

准三后公辨法親王の所奉なる四大寺あり是は往古け堂をしが廢

せしゆ急元禄六年大棟梁甲良宗賀再建施入し同年津深草の

額を掲せしと云ふ此堂をともは津條理の内よりつるゆゑ

まゝ破壊せしと云ふ今津額ハ別所ふ並けり舊地礎地のみ存せり

寂光寺 開基弘法大師寺と東寄にあり

石鳥居 此額字

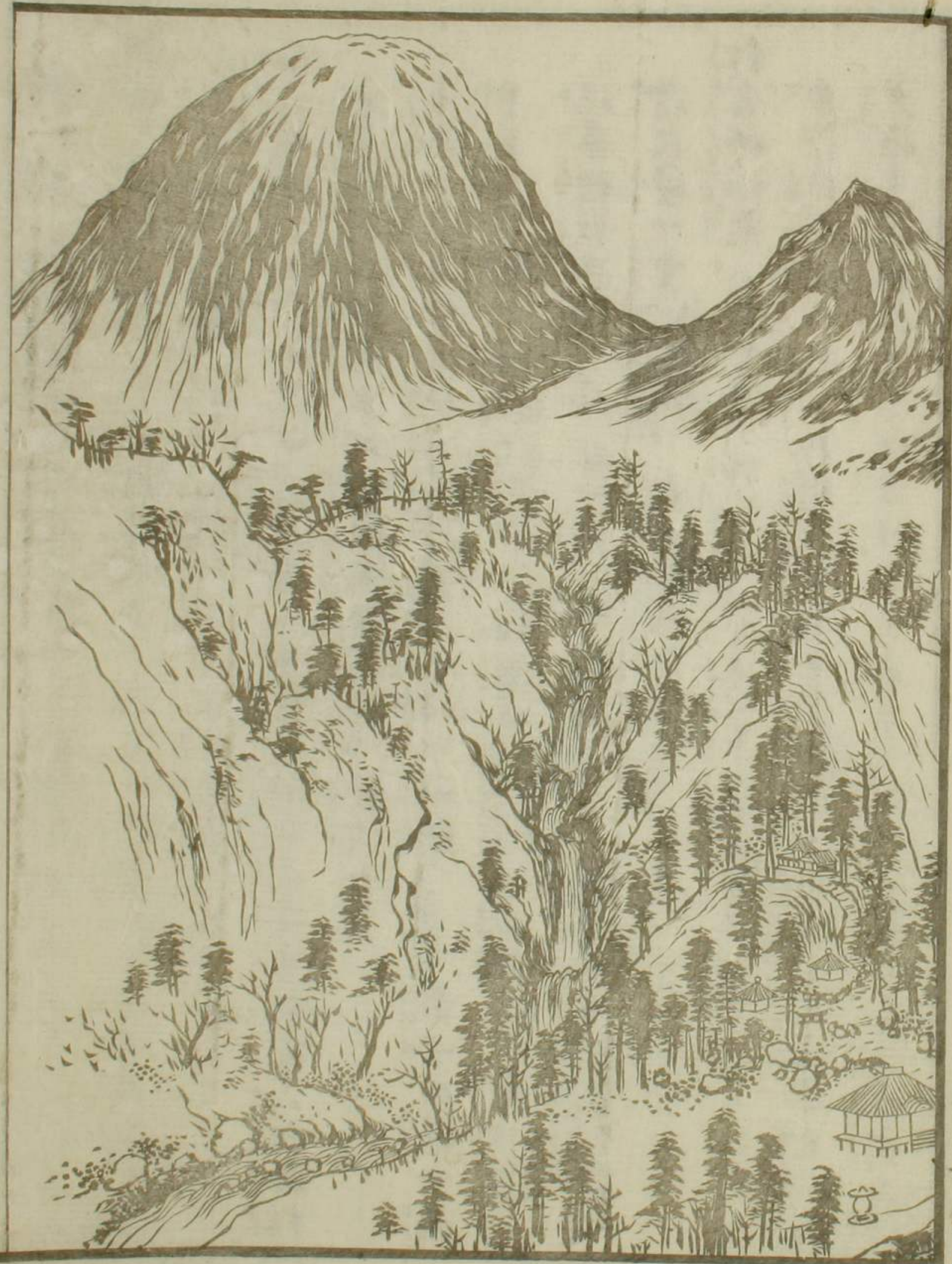
准三后公遣法親王此津真翰あり小叢より真禰滅金小言くおさ

せり

三拾番神堂 鳥居の内石階の下あり

不動堂 此堂ハ弘仁十一年弘法大師始て建立し自仍乃不動堂を

安坐し玉ひ寂光寺と名附し由尚山北古縁起に載た是は古け



寂光

宿屋

三十三

堂を以て寂光権現の別名とす。舊跡あり。

拜殿 香厨の色より石階曲折せしを二町許登り赤塗椽菅二間

半二間以て相殿をなす石階の初小三益赤塗比賣小祠あり

寂光権現 本社七尺許大床造二重木桐瓦赤塗高欄楹上彫物彩

色祭神下照姫命本北辨財天弘法大師勸請をす

宝物 十二の手箱 内小圓入海鏡 小相口白鞘 信国作 白味の鏡一面

外小五六面 後一本 綴とのたをり 紅猪口 曲玉二三箇

法華經教卷 芥者不知 弥勒經一軸 彌陀院中蔵茶 錫杖一本

汗衣装一重 唐綾模帳 釘念仏縁起 浄門主浄律筆卷中不圖画ハ特世常信茶

釘念仏縁起 元禄年中 浄門主浄律筆卷中不圖画ハ特世常信茶

粵に下野國日光山乃別名寂光寺覺源上人西方に志深く志仏朝

夕悔くは勅作りしに或時とち安うくはく俄小息絶ぬ側は侍

軍勢さかど留むるもなぐ茶毘の儀當まんとするに上人

の肌膚猶温あゝ生るが如くあれが燈辺乃送も見合一七日此教

をぬりて人々怪む変に上人忽獲生しけはの形状を語る我圖王

宮にゐるは大王我に告ぐ室やと汝今茲小來る處き小阿ははれ

とを娑婆の群生邪見のもの地獄小落るもの多し汝は地獄のすが

とを見せ衆生を救はせん為たり則大王乃教を随ひ地獄を廻り

らる大地獄百三十六其餘地獄の教を知らば若くは成るものを

見るに悲しむ歎くは憾む圖王宣しく凡夫貪欲心にして惡を修

こと限あずれを死して後十九日の間は十九乃行をうくる衆

業の深淺は懸し釘の長短あり六寸八寸或は寸六寸なり或は

三つ左右の肩ふ二つあまに六つ版又二十版に十は足の左右は

はつ合せくは十九ありけ釘をおる時若くは呼ぶお上は有頂天に

舞光濕布

峰尖如暗角

遠香濕中

欲低料藏小怪

長若石而古

却黑也一梁

系心伊禮 長流抄考



此寂光瀑布の詩
 准三后公辨法親王 御上京乃 初人々に被 命日光八景の詩を
 賦さし先ありて 時長胤も 賦さし奉り 草稿は 自筆ありて
 ゆゑ有て 予得て 予りて 撰りて 爰に 出さ

響さ下い阿鼻底の 聞ゆ 閻王 流く 憐れ ても 自業自得の 報なり 是は
 此苦を除くを 叶ぐ 安樂に 行ふ 仏を 信じ 佛の 布施する 功徳は
 依り 其苦を 減じ といふも 卅三年 過ぐれば 釘抜る といふ
 汝毎月 志す 釘を 修せし 其の 苦を 速に 本國へ 歸り 速育の
 衆生を 教化し 卅九万 過り 念仏を 信じ 佛の 念仏は 業満ぬ
 是を 其苦を 減免す といふ 人々 死す 七と 日 過れば 釘を 抜る とい
 十九箇 あり といふ 十九乃 釘を 打て 釘を 打て 釘を 打て 釘を 打て
 とあり 又は 十九乃 釘を 打て 釘を 打て 釘を 打て 釘を 打て
 功徳之 報令 亡 總意 趣は 墮と 退福 作善の 功は 依り 卅九の 釘乃
 苦を除く 報令 亡 院に ありて 況んや うち 此れを 交へ といふ
 うら 卅九万 過れば 念仏を 信じ 佛の 報は 往生 報ひ あり といふ 一枚を
 授くと 覺る 夢の 覺る といふ ち 上 人 具は 信じて 報は 上 人 具

閑
林
眺
練

裏
見
ノ
瀧



下ハ乃幅口尺許言六七八尺の巻を滝の裏に溜り透る患ひを
減小帝代乃花瀑あり係る名勝なる瀑水を八景の内に入らざりし
うらみといふ嶋へを移れしと歎

清滝村

神橋より一里許茲北入口の字を多居系といふ里むらう

清滝権現乃多居あり跡ありん中禅寺並小豆尾道之の往來なり

民戸三十宇散在し陸田もあり

清滝権現

村内往來の脇にありけ社路を往古よりの鎮座あり

其最初を修す小 天武天皇廿大宝年中役小角と雲通上人二人

大鷲山乃清滝に在りし小淵上小雲起り雷鳴し雨車袖を流し進

至りしゆ忽二人秘咒密言を以て祈禳すれを又忽小天晴たり其

所に大杉あり其上と天物の酋長等數方北眷属をむきる現し出

二人又告て云我等二千年前冥山より佛の附属成り帝大魔王と

なりけ山を領し群生を利益とといひ説き及んて因茲二人杉樹を
号して清滝に不ぬ神と崇めぬ又滝乃多より子大士を安置し其
地を禱むと云 後世仏法擁護の靈區となれりとあれは弘法大師
此神を祀り鎮護せし免又清滝寺を建立せしと云 此はゆゑに密宗の
靈地と清滝権現を祀り山内乃鎮守とすることたり古杉樹あり噴
岩數十丈聳たり所は漸阿り是を清滝と號せり

清滝寺

勝福山金剛成就院と號を往古真言乃道場なり往古弘法

大師開基し其後慈覺大師登山の以一山の僧徒皆台教乃法流と

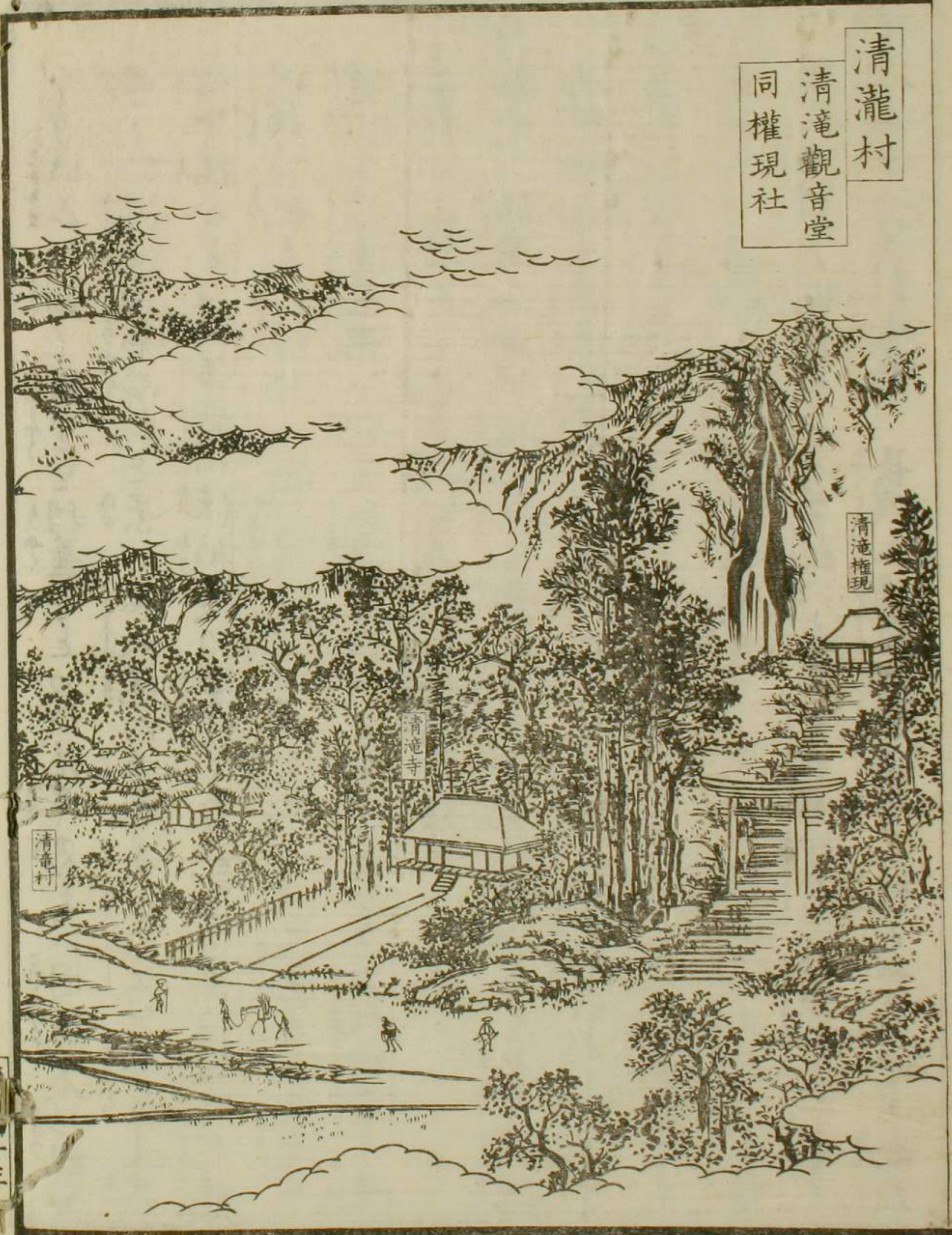
ある此寺も其時より宗流を改めし由とより一山の香華院あり

寛永八年慈眼大師妙道院殘剣建ありしより清滝寺の法名を移

され灌室と定めしと舊記に在るせる由妙尼院の蓋帯あり

清滝觀音堂並別當所

長興山福聚院園通寺と號を觀音堂小お双



清龍村

清滝觀音堂
同權現社

清滝權現

清滝寺

清滝村

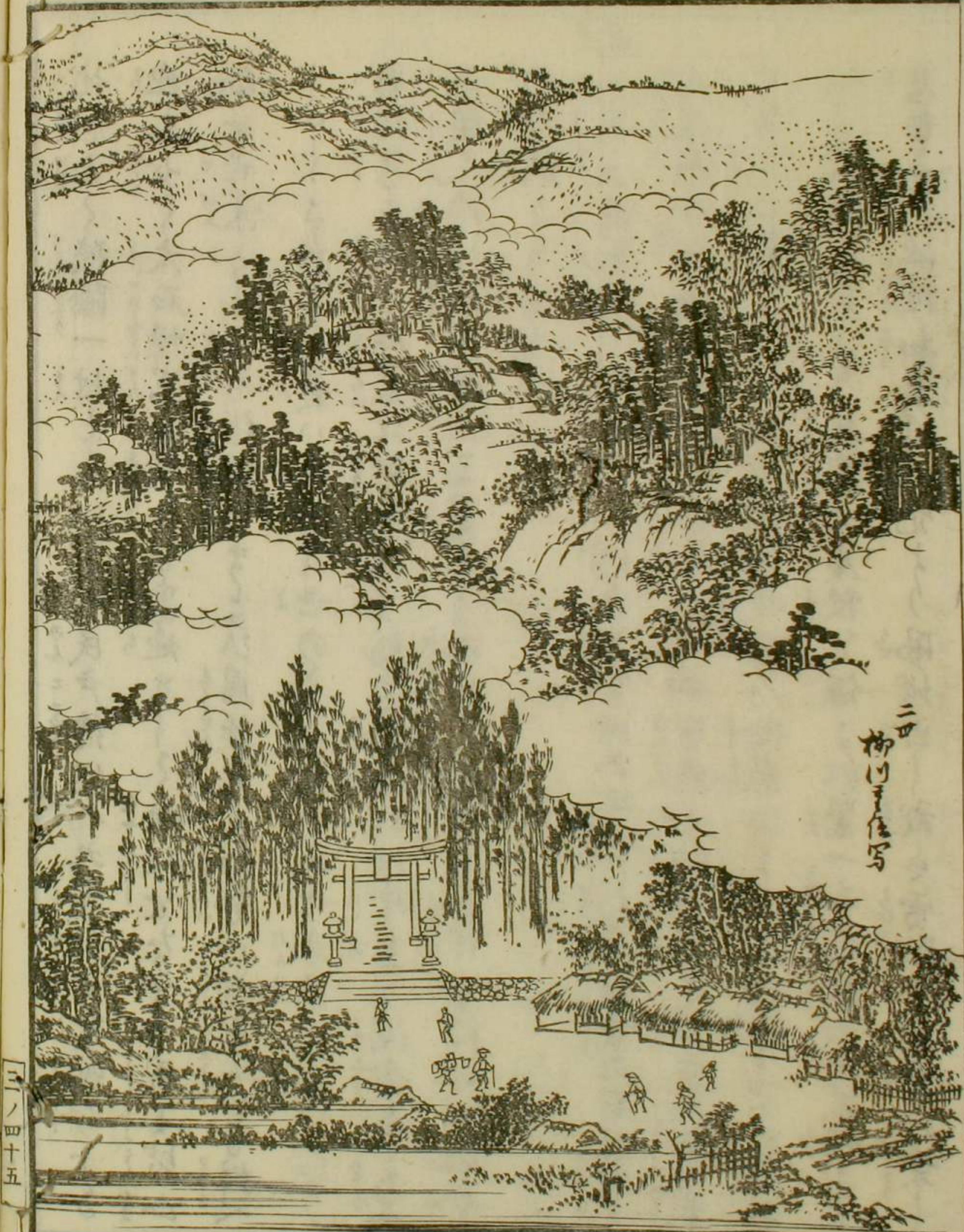
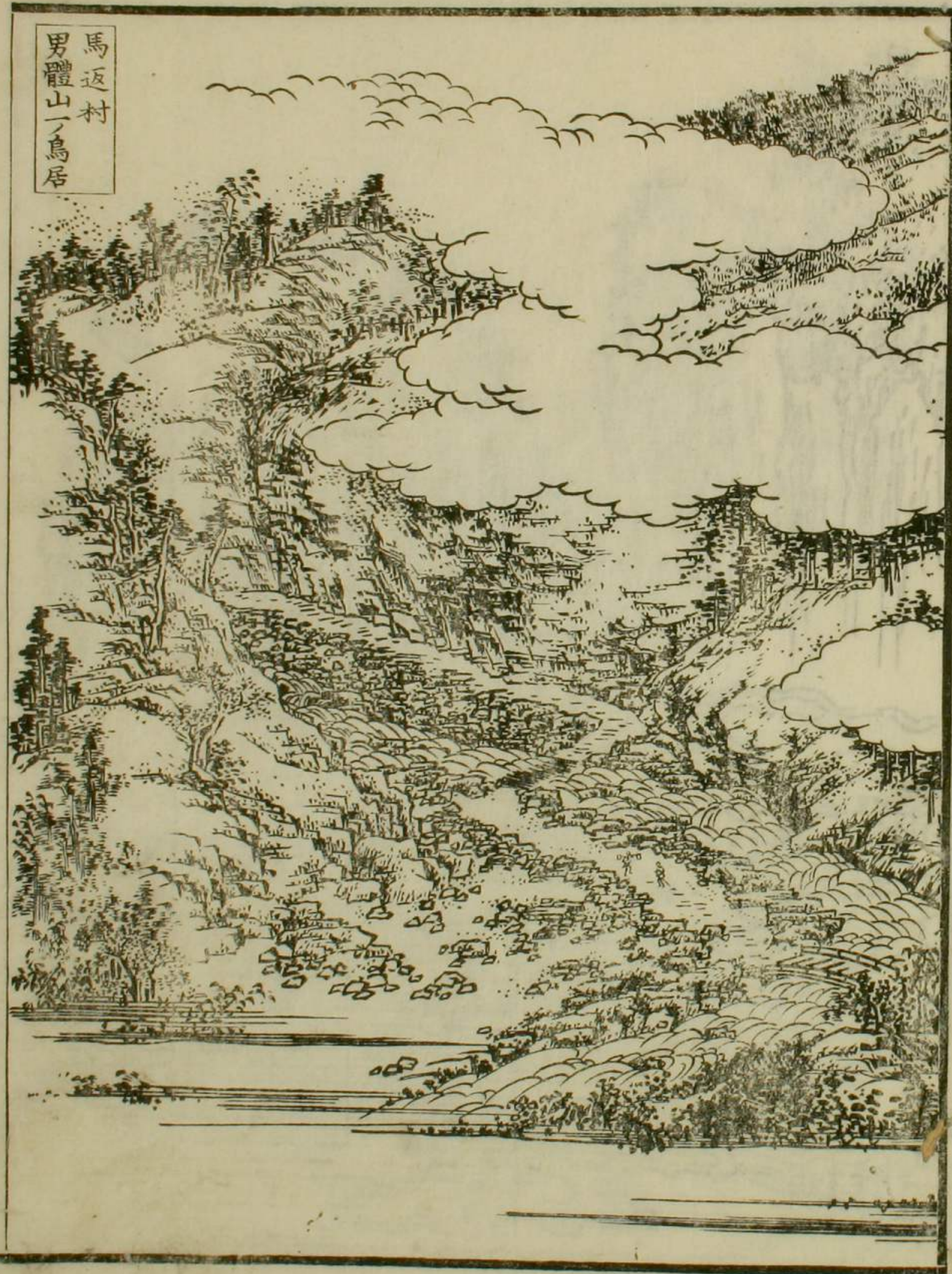
三ノ川

庵を觀者六間に面向拜造拵本寺觀音ハ勝道上人中禪寺の千手
觀音を彫刻し玉ひし其餘を以て作玉ひし千手大士なりといふ
中禪寺の觀音を坂東十八番乃札所あれど女人禁制の山あるゆゑ
前立とて茲小安直女順礼ハ清滝の觀音堂札を納めさす
為なりといふ一説又弘法大師清滝控現を開基し玉ひ時磐山乃漸
の上に千手大士を安置せし謂を以て地を丈小撰清滝控現を
祀て千手大士と其時建立し玉ひとも傳ふ

足尾道 清滝村を少くゆく中禪寺及右左に折てゆき足尾峠左の
方へ向し其先は細尾といふ小村あり上州筋より順礼其餘の旅人
妙義榛名を経て足尾へ掛り當山へ來りその山跡は舊より時
旅人をと備へたる萩河を是より足尾峠乃嶺路二里を踰る
馬返村 細尾村の内ある小名をいへば是は常磐山へ入る所なり

地形よく狹隘一村とらひども民戸終に九字住せし細打する
地も少く大石怪岩の向くを畠地とて耕耘をなせり男女皆山
稼と世業とて女も纏帯をまとい周旋する形勢ハ頗男女とも辨へ
がごとしされども是ハ去りて世のそとより二三十年前と云はるり
萩作等も往く往來に軒をたし移て茶店三軒をたし酒會ありて
小旅人の口腹を養ふと云はる風俗人物等も山中とはいふと鄙野
乃朴訥とも阿はる
第一荒山並風穴 馬返より河原原をいふ町存り往來の右にあり
嶺崇敷十丈なる絶壁二山おありぬ男辨女顔の小き山由急第一荒
とも小二荒ともいふや備其峻嶒小洞窅あり人誤れざる所小
阿はる遠く麓より其窟の廣狭を謀るに豎一丈許幅六七尺程あり
見ゆる其深淺知はれけ穴より風紙出たり或は雷獸とて雲に乘り

馬返村
男體山ノ鳥居



二
馬返村

前二荒山

中得古乃



雲峯



風穴

雷かみなりと同おなじく虚空こくうを飛ひ行ぎやうする畜けいぶの亡あなる穴あなも雷かみなり神かみなり穴あなとていふと
をんされを世よより日光にっこう雷かみなりのすむ所ところなる處ところ又また云いむううけ穴あなを
司つかさどる神かみなり職しやく也なりが今いま絶たる其その子こ孫そん 所ところ宮みやの伶おとこ人ひととあそりといふ
仍なほ考かんがへるに古こ縁えん起おこるい山やま小こ岩いわ密みつ有ありて春秋しゅうしゅう二に度ど宛あて大だい風ふう吹ふ出でる
荒あれはゆゑ庶しよ民みん難なん哉やせしは弘こう法ぼう大だい師し登のぼり山やませられ其その穴あなを碎くだ除ぞる
結け界かい一いつとあるとけ密みつ此こ事ことなる處ところ一いつ丈ぶち小こ付つく山やま乃のみ二に荒あれの説せい
前ぜん篇へんに出いせり

深み澤さの茶ちや屋や 馬うま返がへより湖うみに登のぼり来くる河かう系けい路ろは枝えだ道どう或あるは急きゆう流りゅう小こ架か
せし危き橋きやうを遠とほく山さん路ろを濟わたらんといふ所ところ不ふ由ゆ急きゆう茶ちや店てんを設たく是こゝ
日月にちげつ以もつより八月はつげつ時とき分ぶんを茲こゝへ来きり住すみ系けい詣げいする乃すなはち俗ぞく休きゆう所しよに茶ちや
菓くわ小こ蘇そあるものを有あり山さん路ろハ峻けんなりといふども肩けん輿よあつても宅たくで
又また牛うしを禁きんずるゆゑ中ちゆう禪ぜん寺じ別べつ和わ式しやくを湯ゆ元げんへの飯い米まい主しゆ外がい雜ざつ品ひんを

日ひ々々皆みな脊せ負ふひ登のぼり

地ち藏ざう堂どう 是こゝも涼りやう淨じやう乃すなはち地ち藏ざう堂どうと唱なめけ不ふハ殺ころ生せい禁きん乃すなはち女にょ牛ぎゆう結け界かいの
場ばとて土と俗ぞく呼よぶ深しん淨じやうの女にょ人にん堂どうとも稱なづせり爰こゝを中ちゆう禪ぜん寺じの東とう門もんと
名な附つけ如ごとひ一いつ事じ縁えん記ぎ又また又また禪ぜん那な波は羅ら密みつと稱なづせる由よし
劍けんの峰ほう 此こゝ所ところを中ちゆう禪ぜん寺じ道どう第一だい乃すなはち險けん難なん危き急きゆう此こゝ乃すなはち通つう路ろきえんと
するが如ごとく不ふ由ゆ急きゆう枝えだ乃すなはち役やく者しやて通つう路ろの便べんとせり此こゝ上うへを渡わたる
あやふき小こ磔さつく形かたハ呼よけり
方ほう等とう池ち け急きゆう深しん谷こく乃すなはち峻けん山さん万まん重じゆうあつて巒らんたる水みづの方ほう有あり涼りやう淨じやうより
瀑ばく布ふ飛ひ流りゅうを遠とほくする小こ瀑ばく幅はく三尺さんしやく許こゝろ言ことは五ご丈ぶち程ほどなり
般はん若じやく滝たき 是こゝも同おなじ不ふ由ゆて坤こん北ぺい山さん谷こくより落おち来きる瀑ばく幅はく八九はちく尺せき言ことは二に丈ぶち
許こゝろ水みづ勢せいは方ほう等とう池ちより大だい海かいと名なをけ二に瀑ばくの名なとする謂いハち海かい
華け嚴えん滝たきの條じょうに記きせり



丙申於
十月
椿山
寓
平岡

方等瀑布
般若瀑布



中の茶屋 深澤より上と阪路急み登りがきゆ多休所を役く
不動堂 古記より開祖上人教曼道珍等命じて堂宇造立せら
せし不動堂を安齋とありといふ茲より大平といふ所を経て中禪
寺のかまへなり又一説より弘仁十一年弘法大師登山の肘真清
阿闍梨同く兜山に江尻に蘇巖寺を建てる不動堂を安せしとあり
茲あるといへり

大平 此處より中禪寺構にありといふ大抵平坦あり路傍には懸崖
のそ多く其餘乃古木の碧翠を重祜る常に日色を足は雲霧深き
所ゆ急樹々の梢は藻草の如く茂る葉もなき葎なるものありが
三四尺あまり古木に纏ひて垂るもの殊に多し是れいぼちの源
山ありと生るものあり其名をサルヲガセと唱へ

日光山志卷之三終



Red seal impression, likely a collector's or publisher's mark.

